京都市内遺跡試掘調査概報

平成15年度

2004年3月

京都市文化市民局

写真1　伏見城跡・階段遺構（西から）

写真2　平安京左京四条一坊三町跡・園池遺構（北から）

ご あ い さ つ

京都市は，山紫水明の恵まれた自然と世界に誇る貴重な文化遺産に満ちた日本文化の中核を担う都市であります。市内に存在する，古代から近世までの各時代を特徴付ける貴重な遺跡は，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私たちは，これを後世に伝え残していく責務があります。

しかしながら，今日，埋蔵文化財包蔵地内において土木工事等による開発行為が，規制なく進められれば埋蔵文化財に重大な影響を及ぼしかねません。

本市では，こうした状況を踏まえ，「保存」と「開発」との調整をしっかりと行いながら，貴重な埋蔵文化財の適切な保護に努めております。

さて，この度，平成15年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し，実施したものであります。

各調査の実施に当たり御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導・御助言を賜りました関係機関の方々に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都市の歴史を知り，理解を深めるための一助として，京都を愛する多くの皆様のお役に立てば幸いに存じます。

平成１６年３月

京都市文化市民局長
柴 田 重 徳

例　　言

1　本書は，京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成15年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。平成15年１月から12月まで実施した試掘調査のうち，重要な成果のあったものを対象に概要を報告している。ただし，試掘の結果発掘調査を指導したものについては，発掘調査報告書を待つこととし，一覧表にのみ掲載している。

2　試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については，試掘調査一覧表に掲載（37～40頁）している。なお，各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。

3　本文の執筆分担は，本文の末尾に記している。

4　本書に使用した地図は，本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1 ～13　1/8,000　　図版14～19　1/10,000

5　本書に使用した土壌色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

6　使用方位・座標値は，日本測地系（改正前）平面直角座標系Ⅵを使用した。

7　遺物整理にあたっては，岩本淳子・上茶谷美保・守山義幸の協力を得た。

8　調査及び本書作成は京都市埋蔵文化財調査センターが担当し，次の機関の協力を得た。
京都市文化市民局文化部文化財保護課・（財）京都市埋蔵文化財研究所

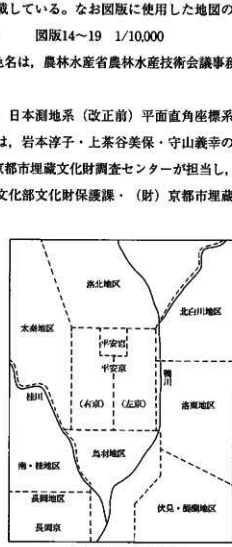


図1　調査地区割図

目　次

頁

Ⅰ　試掘調査の概要 …… 1

Ⅱ　平安宮 …… 3

1　朝堂院応天門跡・聚楽遺跡（中京区聚楽廻南町25-4） …… 3

Ⅲ　平安京左京 …… 5

1　四条一坊三町跡（中京区壬生御所ノ内町17-3，15，16-1） …… 5

2　五条二坊九町跡（下京区四条堀川町262他） …… 10

Ⅳ　その他市内遺跡 …… 12

1　史跡名勝 嵐山（右京区嵯峨柳田町35，35-44） …… 12

2　法勝寺跡（左京区岡崎法勝寺町 京都市動物園内） …… 15

3　伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡（伏見区桃山町金森出雲3-25） …… 18

4　唐橋遺跡（南区唐橋川久保町17，22の内，予定地番17-3） …… 23

5　中久世遺跡１（南区久世中久世町5-16，17-1） …… 28

6　中久世遺跡２（南区久世殿城町155，156他） …… 30

7　長岡京跡・淀城跡（伏見区淀池上町） …… 33

Ⅴ　試掘調査一覧表 …… 37

報告書抄録 …… 41

図 版 目 次

図版 1　平安宮
図版 2　左京　北辺・一・二・三条　一・二坊
図版 3　左京　北辺・一・二・三条　三・四坊
図版 4　左京　四・五・六条　一・二坊
図版 5　左京　四・五・六条　三・四坊
図版 6　左京　七・八・九条　一・二坊
図版 7　左京　七・八・九条　三・四坊
図版 8　右京　北辺・一・二・三条　三・四坊
図版 9　右京　北辺・一・二・三条　一・二坊
図版10　右京　四・五・六条　三・四坊
図版11　右京　四・五・六条　一・二坊
図版12　右京　七・八・九条　三・四坊
図版13　右京　七・八・九条　一・二坊
図版14　上京遺跡・史跡名勝嵐山・植物園北遺跡・松室遺跡
図版15　白河街区跡・六勝寺跡・史跡賀茂御祖神社境内・六波羅政庁跡
図版16　法性寺跡・芝町遺跡・中久世遺跡・中臣遺跡・山科本願寺跡
図版17　伏見城跡・唐橋遺跡・淀城跡
図版18　鳥羽離宮跡・上鳥羽遺跡・下鳥羽遺跡
図版19　長岡京跡

挿図目次

頁

図1　調査地区割図・・・・・・・・・・例言
図2　調査位置図・・・・・・・・・・・・3
図3　トレンチ位置図・・・・・・・・・・3
図4　各トレンチ土層図・・・・・・・・・4
図5　出土遺物拓本・実測図・・・・・・4
図6　調査位置図・・・・・・・・・・・・5
図7　調査区位置図・・・・・・・・・・・6
図8　1区西壁土層断面図・・・・・・・・6
図9　4区遺構平面図・東壁断面図・・・7
図10　出土遺物実測図・・・・・・・・・・8
図11　調査位置図・・・・・・・・・・・・10
図12　トレンチ位置図・・・・・・・・・・10
図13　井戸跡見通し断面図・平面図・・・11
図14　出土遺物実測図・・・・・・・・・・11
図15　調査位置図・・・・・・・・・・・・12
図16　調査区位置図・遺構平面図・・・・13
図17　土層断面図・・・・・・・・・・・・13
図18　出土遺物実測図・・・・・・・・・・14
図19　調査位置と既往調査位置・・・・・15
図20　トレンチ位置図・・・・・・・・・・16
図21　各トレンチ土層図・・・・・・・・・16
図22　円塔実測図及び瓦製印塔拓影・・・17

頁

図23　調査位置図・・・・・・・・・・・・18
図24　トレンチ位置図・・・・・・・・・・19
図25　3トレンチ北壁土層断面図・・・・20
図26　1トレンチ南壁土層断面図・・・・20
図27　4トレンチ階段遺構実測図・・・・21
図28　4トレンチ南壁土層断面図・・・・21
図29　調査位置図・・・・・・・・・・・・23
図30　調査区位置図・・・・・・・・・・・23
図31　遺構平面図・・・・・・・・・・・・24
図32　西拡張区遺構平面図・・・・・・・・25
図33　調査区西壁土層図・・・・・・・・・25
図34　出土遺物実測図・・・・・・・・・・26
図35　調査位置図・・・・・・・・・・・・28
図36　トレンチ位置図・・・・・・・・・・29
図37　トレンチ北端断割り東壁土層図・・29
図38　調査位置図・・・・・・・・・・・・30
図39　土層断面図・・・・・・・・・・・・30
図40　調査区位置図・遺構平面図・・・・31
図41　出土遺物実測図・・・・・・・・・・32
図42　調査位置図・・・・・・・・・・・・33
図43　調査区位置図・・・・・・・・・・・34
図44　検出遺構図・・・・・・・・・・・・35

表目次

頁

表1　年次別試掘調査実施件数表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
表2　試掘調査一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37～40

写 真 目 次

頁

写真１　伏見城跡・階段遺構（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・巻頭図版
写真２　平安京左京四条一坊三町跡・園池遺構（北から）・・・・・・・・・・・・巻頭図版
写真３　１区溝１検出状況（南東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
写真４　井戸曲物部分検出状況（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
写真５　１区溝１検出状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
写真６　２トレンチ溝検出状況（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
写真７　３トレンチ落込み検出状況（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
写真８　階段遺構（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
写真９　階段遺構（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
写真10　西拡張区・遺構完掘状況（南西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
写真11　杭材検出状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
写真12　２区石垣検出状況（南西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
写真13　３区石垣検出状況（北東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
写真14　４区石垣検出状況（南西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

Ⅰ　試掘調査の概要

1　遺跡地図の改訂

京都市内には古代から近世に至るまで各時代を特徴付ける貴重な埋蔵文化財（遺跡）が多数存在しているが，京都市ではこれらの遺跡の所在を明らかにし，文化財保護行政を円滑に進めるとともに遺跡の保存と活用が適切に図られるよう「京都市遺跡地図」を発行している。この「京都市遺跡地図」は，昭和47年度の初版作成以来，改訂を重ねて平成７年度に第６版を発行し，それ以降７年が経過した。その間，埋蔵文化財の調査・研究により，新遺跡の発見や現行遺跡の見直しによる範囲の変更などが生じてきたこともあり，また，史跡・名勝・天然記念物の指定件数も増加したため，平成14年度に遺跡地図改訂作業を行い，この度第７版を発行した。そして平成15年６月２日からこの新遺跡地図によって文化財保護上必要な行政指導を行うとともに，文化財保護の普及に努めている。

遺跡の件数及び面積を改訂前と比較すると，改訂前の遺跡件数が578件で総面積が64ｋ㎡であったのに比べ，今回の改訂により遺跡件数は663件に，また総面積は76ｋ㎡と，ともに増加している。今回の改訂により新規に掲載された遺跡を種類別にみると，方広寺跡（東山区）等の寺院28件，松尾大社境内（右京区）等の神社18件，下三栖遺跡（伏見区）ほか集落跡・散布地19件，太秦馬塚町遺跡（右京区）ほか古墳・古墳11件等があり，また上京遺跡（上京区）・御土居跡（上京区他）・太閤堤（伏見区）など中世から戦国期を特徴付ける遺跡も新たに掲載した。

この「京都市遺跡地図」は京都市役所や京都市埋蔵文化財調査センター（以下，センターという）で販売している他，センターのホームページにも掲載して広く周知しているところである。

2　平成15年の試掘調査

さて，これら埋蔵文化財の包蔵地内で行われる土木工事等の届出（文化財保護法57条の２）及び通知（同57条の３）の件数は，平成14年は888件であったが，平成15年では926件を数えた。この土木工事等の届出・通知のうち，比較的大規模な場合や，小規模なものではあっても重要遺構が存在する可能性のある場合は，工事前に事業者の協力を得て試掘調査を実施している。

この概要報告書は，センターが平成15年１月から同年12月までの１年間に渡って実施した試掘調査の結果をまとめたものである。試掘調査は，遺跡の有無や残存状況を確認し，開発事業との調整，発掘調査の範囲及び調査に要する期間や経費の算定などのために行っており，平成15年では合計71件の試掘調査を実施している。各年の試掘調査の件数をここ10年間でみた場合，平成６年が100件で最も多く，平成７年から平成12年の６年間では平成９年の91件が多い方で，後は80件台と落込んでいる。また，平成13年から平成15年までの３年間は70件台とさらに減少している。この件数の変化は，この間の経済動向を反映したものであることは言うまでもないが，平成15年の土木工事等に伴う届出・通知の総数は，平成14年よりも40件近く増加しており，平成16年の動

向が注目される。

3　各地区の調査

センターでは京都市内を遺跡の性格と地域性を基に11の地区に区分しているが，平成15年に実施した試掘調査71件の内訳をこの地区別にみると，平安宮地区７件，平安京左京地区10件，平安京右京地区18件，太秦地区３件，洛北地区４件，北白川地区２件，洛東地区６件，伏見・醍醐地区６件，鳥羽地区６件，南・桂地区５件，長岡京地区４件であった。このうち８件について発掘調査の指示を行っている。その内訳は平安京左京地区２件（No.6・No.23）と平安京右京地区が２件（No.31・No.36）で，洛北地区1件（No.46），伏見・醍醐地区1件（No.56），長岡京地区2件（No.16・No.17）である。平安京左京のNo.6では六条坊門小路の路面を検出し，またNo.23では，鎌倉時代の土師器を多量に含んだ土器溜まりを検出することができた。平安京右京のNo.31・No.36ではともに平安時代前期の建物跡や溝，土壙を検出しているが，特にNo.31ではその後の発掘調査により，建物跡以外に，泉を伴う園池跡を良好な状態で検出している。洛北地区のNo.46は植物園北遺跡であるが，ここでは平安京以前の柱穴や土壙を，伏見・醍醐地区の伏見城跡のNo.56では江戸時代前期の建物跡や土壙を検出し，武家屋敷跡の一端を窺うことができた。また，長岡京地区のNo.16・No.17は，長岡京跡と淀城跡とが重複する遺跡であるが，No.16では淀城に関連する大型礎石を，さらにNo.17でも淀城の石垣を検出し，発掘調査の指示をした。No.16で検出した礎石は古絵図に描かれている米蔵のものと考えられたが，その後の発掘調査によりその米蔵跡の全容がほぼ明らかとなり，古絵図と遺跡とが符合することが確認され，大きな成果を得ることができた。

また，発掘調査以外に，No.24他２件については試掘を延長して調査を行っており，No.12他６件については設計変更指示により遺構を保存している。　（北田栄造）

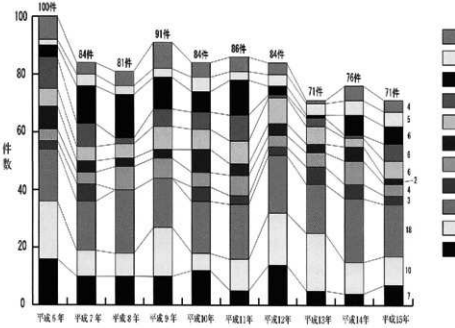


表１　年次別試掘調査実施件数表

Ⅱ-1　平安宮朝堂院応天門跡・聚楽遺跡　No.2

1　調査経過

調査地は千本通と太子道の交差点から南約70mの地点で，推定では平安宮朝堂院の応天門とこれに取り付く西翼廊のすぐ北側に当たる。南隣地では1979年度に発掘調査が行われたが，応天門に関する明確な遺構は見つかっていない。千本通の東側に比べて遺構検出面が深かったことから，報告者は「江戸時代の早い時期に遺構上面が削平された」と推定している[1]。今回当該地に寄宿舎建設が計画されたことに伴い，2003年２月20日に試掘調査を実施したところ中世以前の遺構は認められず本格的調査は不要となったが，多量の瓦類の出土をみたため，工事中の立会調査を６月17・19・20日と７月15日に実施した。

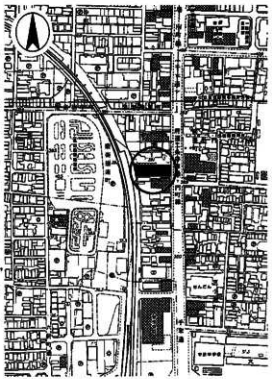


図2　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

試掘は基壇北辺の検出をにらみ，南北トレンチを３本設定した。いずれのトレンチでも，敷地南辺から４ないし５m以北の地山が大きく掘り込まれており，１・３トレンチではGL-2.4mの深さに及ぶ。埋土中から平安時代の瓦が大量に出土したが，同時に染付等も出土しており，遺構年代は江戸時代を遡らない。おそらくは，いわゆる聚楽土の採掘がここでも行われたものであろう。

立会は延べ４日間にわたって行ったが，工事範囲のほとんどは近世以降の掘削を受け，遺構面が残っていなかった。採集遺物は全て瓦で敷地東半に多く，特に１トレンチ付近から敷地北東隅にかけて，多数の瓦が出土した。

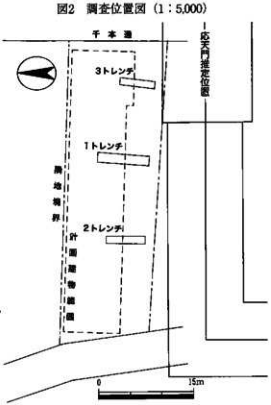


図3　トレンチ位置図（1：600）

3　遺　物

遺物は全て瓦類で，コンテナ５箱分が出土した。主なものを以下に述べる。

１は均整唐草文軒平瓦で，凸面をタテヘラケズリし，凹面には粗い布目が残る。『平安京古瓦

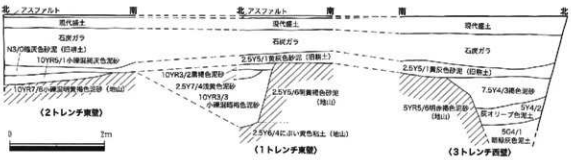


図4　各トレンチ土層図（1：80）

図録』No.397～399などと同笵[2]。立会時に廃土中から採集した。

2は刻印文字瓦。平瓦凹面に「工」の陰字を押印する。全体では「木工」となるものである。凸面に縄タタキ，凹面に布目を残す。1トレンチの北東付近で，旧耕土と地山の間に残っていた包含層から工事立会時に採集した。

3は線刻文字瓦である。1トレンチ北半の土取り跡から出土した。平瓦で，タテナデとタテヘラケズリを施した凸面に「真乙」なる人名を線刻するが，破片であるため平瓦凸面のどの部位であるかは分からない。凹面はかなり摩滅しており，わずかに布目が残る。本資料に見るような「乙」の字体は，藤原京期頃に多く稀に奈良時代にもあるが[3]，瓦の胎土・焼成と，製作が一枚作りらしいことから，奈良時代のものである可能性が高い。遷都に伴い再利用されたものであろう。

4　まとめ

貞観8（866）年の政変で著名な応天門の痕跡を確認する調査であったが，遺構面自体がほとんど残っておらず，目的を果たすことができなかった。近世に聚楽土の採掘が活発に行われた結果と考えるが，残りのよい地点でも地山直上に旧耕作土が認められることから，採掘以前に耕作によって削平が進んでいたとも考えられる。土採り跡の埋土から大量に出土した瓦片は，採掘に伴い出土したものを不要な夾雑物として投棄したものと推測する。これらが応天門所用であるという確証はもちろんないが，近傍の建物のものとは言えるだろう。　（堀　大輔）

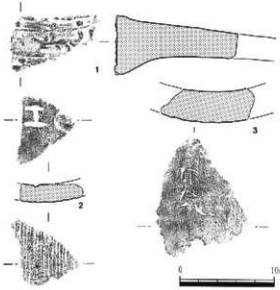


図5　出土遺物拓本・実測図（1：4）

註

1）堀内明博「朝堂院跡」（(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安宮Ⅰ』pp.149～150，京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊，1995年）

2）平安博物館編『平安京古瓦図録』，雄山閣，1977年

3）文字の判読と字体については，京都大学の鎌田元一先生・西山良平先生に御教示いただいた。

Ⅲ-1　平安京左京四条一坊三町跡　No.24

1　調査経過

調査地は，四条通坊城の北側，錦坊城児童公園の南側に隣接する中京区壬生御所ノ内町17-3，15，16-1である。当該地は平安京左京四条一坊三町の南東隅に相当し，敷地南端を錦小路が，敷地東端を坊城小路がそれぞれ通ると予想されていた。

調査は，錦小路に関連する遺構を確認する目的で平成15年９月17日に南北方向の調査区を３箇所設定して行った。その後，基礎工事に伴う立会調査により池跡が確認されたため，追加調査を実施することになり，10月22日から29日にかけて追加調査を実施した。合計７箇所の調査区を設定した結果，調査面積は47㎡となった。

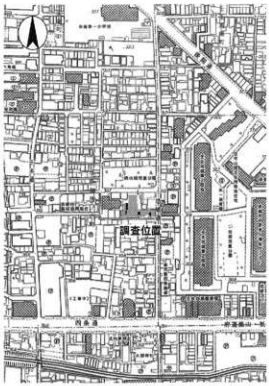


図６　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

錦小路に関連する遺構を検出する目的で設定した１区及び３区では，錦小路北側溝と考えられる溝を検出した。４区については，平安時代中期の池跡を検出した。

１区から３区の基本層序は，現代盛土が現地表下0.6m，その下層に旧耕作土があり，３から４層の遺物包含層が続く。この下層，現地表下1.1mのところに浅黄色砂礫と平安時代中期の遺物包含層があり，溝１と土壙２を検出した。さらに，平安時代の包含層の下位，現地表下1.2mでにぶい褐色砂礫の地山になり，溝３を検出することができた。

溝１　１区，３区で検出した溝で，上端幅が0.7から１m，下端幅が0.45から0.6m，深さ0.35から0.6mを測る。掘形は上部が大きくバチ形に開き，下部が深鉢形を呈している。なお，２区では痕跡すら確認できず調査区全体が流路化していた。埋土から土師器皿や白磁片が出土している。この溝と錦小路北築地心との心々距離は約3.2mあり，推定される小路の溝と築地の心々距離（約2.1m）よりも南に1.1mずれるものの，錦小路北側溝と考えた。

池（巻頭写真２・図９）　平安時代前期の園池遺構で，４区で検出した。４区の基本層序は，現代盛土が現地表下約1.0m，時期不明の①層を挟んで，②～⑧の中世整地層ないし遺構埋土が切り合いながら存在する。園池はその下で検出した。

遺構は陸部の上面が若干削平されているものの，調査区内での残りは極めて良かった。調査区

の北東隅と南で陸部となっていて，池は西から北西へ向けて大きく広がり，南東へ向けて幅を狭める。北東側の岸に沿って拳大の円礫が約2.0～2.5m幅で敷き詰められており，北西から南東へ向けて緩やかに低くなっている。また，この礫敷き部分は浅い溝状を呈しているため，北西に広がる池本体から水が流れ出していく部分に相当するのではないかと考える。

南側の岸には特段の拵えはされてなかったが，岸の斜面から池底にかけて，一括投棄された大量の土器と木製品が出土した。土器は大部分が土師器の杯・皿・椀で，緑釉陶器が一定量と，わずかに黒色土器が混じる。ほとんどが完形かそれに近く，木製品と折り重なって検出された。

また，南側の陸部を調査の最後に断ち割ったところ，⑯層以下の地山の上に⑭・⑮層を積んで

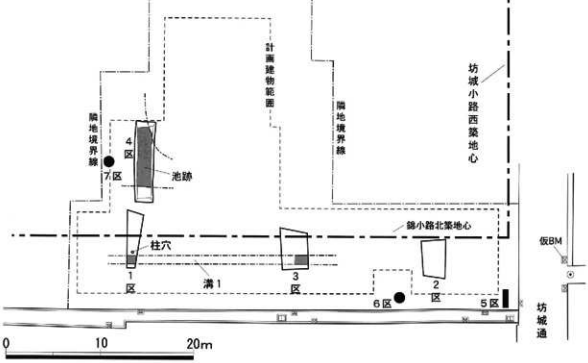


図7　調査区位置図（1：400）

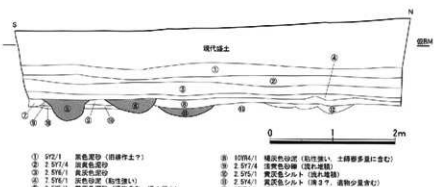


図8　1区西壁土層断面図（1：60）

形成していることが判明した。造成土中から僅かに出土した土師器片は9世紀後半のもので，一括投棄された土器群との間にほとんど年代の隔たりは見られない。

その他の遺構としては，7区で土器一括投棄の続きを，5区で池状堆積を確認した。

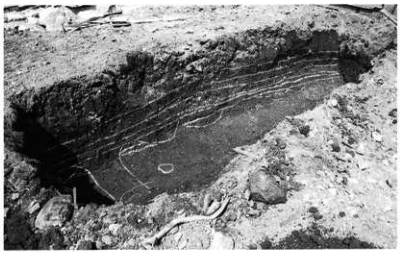
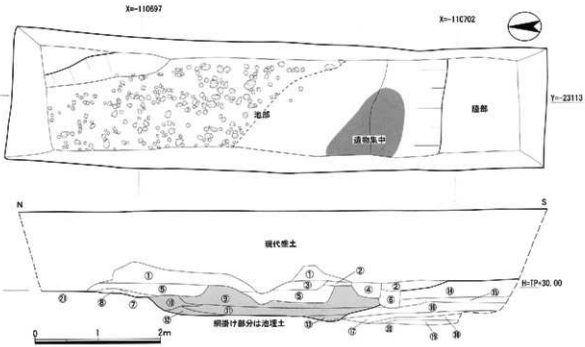


写真3　1区溝1検出状況（南東から）

3　遺　物

1から3は，1区の⑧層である褐灰色砂泥層から出土した9世紀末頃の土師器皿で[17]，口縁端部が上方に短く屈曲している。4も同型の上師器皿であるが，5，6とともに溝1埋土から出土した。5は外面が1段凹みナデの土師器皿，6は口縁部が玉縁形の白磁椀で，いずれも12世紀代のものと考えられる。7から9はあげ土から回収した緑釉陶器椀で京都近郊産と考えられる。



① 10Y4/2　オリーブ灰色砂泥（小礫混）
② 7.5Y5/3　黄褐色砂泥・やや粘質，土師器小片含泥（中世整地層）
③ 5Y4/1　灰色砂泥（礫混）
④ 5Y4/1　灰色砂泥（中礫多く含む）
⑤ 5Y4/1　灰色微砂（礫混）
⑥ 7.5GY4/1　暗緑灰色泥土（中礫混）
⑦ 10YR4/1　褐灰色砂泥
⑧ 10YR5/2　灰黄褐色細砂
⑨ 7.5GY4/1　暗緑灰色砂泥（動性強）：池埋土
⑩ 10Y4/2　オリーブ灰色微砂（礫混）：池埋土
⑪ 7.5GY4/1　暗緑灰色砂泥（微砂混）：池埋土
⑫ 10Y4/1　灰色砂泥（小礫混）：池埋土
⑬ 10Y3/1　オリーブ黒色微砂（巻大礫含む）　洲浜部成土
⑭ 10Y4/2　オリーブ灰色細砂（礫混）：陸部造成土
⑮ 10YR4/2　灰黄褐色砂泥（粘質）
⑯ 7.5GY4/1 暗オリーブ色微砂：流水堆積
⑰ 7.5GY4/3 暗オリーブ色細砂：流水堆積
⑱ 7.5Y4/1　灰色微砂：流水堆積
⑲ 7.5Y4/2　灰オリーブ色細砂：流水堆積
⑳ 7.5Y4/3　暗オリーブ色砂礫：氾濫堆積
㉑ 7.5Y5/2　灰色微砂（礫混）

図9　4区遺構平面図・東壁断面図（1：60）

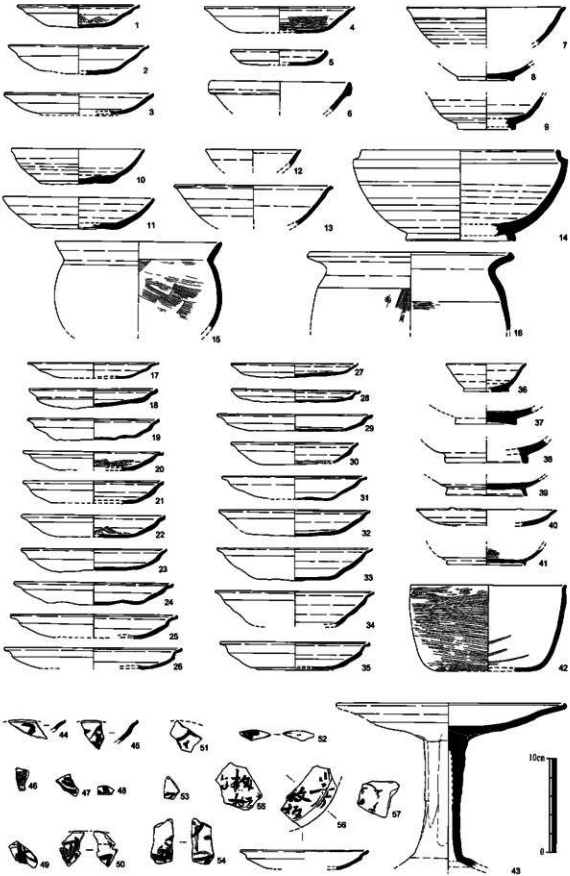


図10　出土遺物実測図（1：4）

10～16は5区池状堆積土からの出土で，10・11が須恵器杯，12が緑釉小椀，13が緑釉椀，14が須恵器鉢，15・16が土師器甕である。

17以下はすべて4区池跡の遺物集中部（一括投棄）の出土で，いずれも9世紀後半のものである。木製品を含めコンテナおよそ4箱分が出土した。17～26は土師器杯。内面底部の粗いナデの下にハケメが残る個体が多い。27～29は皿，30～35が椀で35には低い高台が作られる。灯明に使用されたものが散見され，中には内面のほとんどに煤が付着するものもある。36～40は緑釉陶器で，小椀（36），椀（37～39），輪花皿（40）がある。小椀は他にも数点あって，当地では出土が目立つ。41は黒色土器の椀で，いわゆる内黒のものである。42も内黒の黒色土器であるが，鉢形のやや特殊な器形である。内外面を密にヘラミガキするが，内面は図示できないほど特に緻密である。外面には使用痕として炭化物が全面に付着する。43は土師器高杯。

44以下は同じく遺物集中部から出土した墨書土器で，57が高杯の杯部である他は，すべて杯・椀・皿類の破片である。墨書のない土器が取り上げ後接合可能なのに比して，墨書土器はほとんど接合できず，投棄状況に差異が認められる。小片のためほとんど判読不能であるが，55・56はともに「救」字を二字ずつ書き並べており，習書と思われる。53・54も何画もの重ね書きをしており習書の可能性が高い。57は「て□尓」とひらかなを書く。ひらかなの実例としてはかなり古い部類に入る[3]。

土器群とともに出土した木製品は，著が分かる程度で用途不明のものが多い。短冊状に加工されたものが多く，屋根葺材かとも思われるが判然としない。また，燃えさしのようなものも目立つ。

4　まとめ

今回の調査では，平安中期初頭（9世紀後半）に遡る園池と，12世紀頃に埋没した錦小路北側溝を確認することができた。調査した左京四条一坊三町は，「累代の後院」である朱雀院と朱雀大路を挟んで向かい合う一等地であるが，史料は平安時代の居住者を伝えていない。5区で確認した池状堆積が園池の一部とするならば，中期初頭，三～六町の四町にわたる大型宅地があった可能性がある。平安後期には四・五・六町のそれぞれに居住者が知られることから[1]，9世紀後半に池が機能を停止した後，分割されていったものかと思われる。また，錦小路側溝の埋没年代は周辺の条坊側溝の有り様と一致しており，一帯の条坊機能の下限を示している。

（馬瀬智光・堀　大輔）

註

1）小森俊寛・上村憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年）

2）現在最古のひらかな史料は貞観9（867）年の「有年申文」である（『平安遺文』152号）。墨書の判読に当たっては，京都大学の西山良平先生に御教示いただいた。

3）（財）古代學協會・古代學研究所『平安京提要』p.245，角川書店　1994年

Ⅲ-2　平安京左京五条二坊九町跡　No.26

1　調査経過

調査地は，四条堀川の交差点南東角の下京区四条堀川町262，高野堂町387，柏屋町６である。平安京では左京五条二坊九町の北西角地にあたるが，当該部分に関する平安時代の占有状況は不明である。ここに集合住宅の建設が計画されたため，平安期の遺構の残存状況を確認する目的で平成15年11月６日に試掘調査を実施した。集合住宅の計画建築面積は1,037㎡，調査面積は112㎡であった。

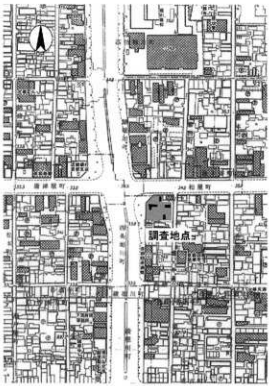


図11　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

計画建物範囲内に４箇所の調査区を設定したが，４Ｔを除き，既存建物の解体により遺構面は消失していた。土層の堆積過程は，４Ｔの観察によると，現地表下1.4mまで現代盛土，同1.96mまで近世後半の褐灰色泥砂層となり，中世以前の遺物包含層はなく，明黄褐色泥砂の地山となっている。

井戸跡　１Ｔの北西隅で井戸の最下部に水溜として据えられた曲物跡を検出した。検出面は現地表下2.56mで，この直上まで建物解体の影響が及んでいた。曲物の残存高は41cm，平均直径57cmであり，綴合が外れて平面形が逆６字形になっている。曲物を据えるための掘形は小さく，曲物にほとんど外接している。井戸の上部構造は攪乱により不明で

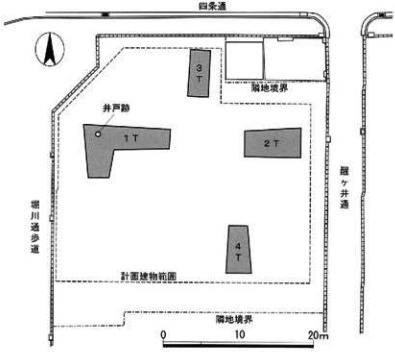


図12　トレンチ位置図（1：500）

あるが，隅柱が北側に２本残っていた。曲物内と綴合の外れた部分の埋土が同じであることから，井戸が廃棄される段階では，既に綴合が外れていたと考えられる。

また，曲物内には拳大の円礫と土師器皿等が多数埋まっていたが，集中性や整然とした配置状況はなく，意図的な埋納とは考えられない。

写真４　井戸曲物部分検出状況（南から）

３　遺　物

曲物内で出土した遺物の総破片数は75片で，須恵器８，丸瓦１，軒平瓦１，灰釉陶器３，緑釉陶器５，土師器51，白色土器１，瓦器１，砥石１，木炭１片となっている。

図化可能な土師器皿８点と軒平瓦を掲載した（図14）。土師器皿は，いわゆる「て」字状の口縁部をもち，口径から小（11cm前後：1～6），中（15cm前後：7），大（17cm前後：8）に分けられる。

軒平瓦（9）は長岡宮式7757Aと同文で谷田瓦窯産の可能性がある。

４　まとめ

出土した土師器皿等から，この井戸が廃棄されたのは，10世紀末頃（小森・上村編年[1]の平安京Ⅲ期新段階）と考えられ，平安時代の古有状況を確認することができた。　　（馬瀬智光）

註

1）小森俊寛・上村憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（（財）京都市埋蔵文化財研究所1996年）

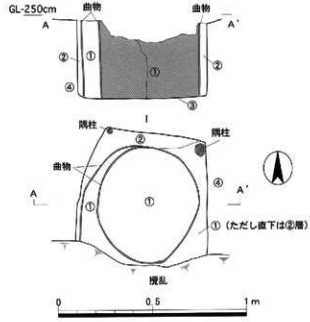


図13　井戸跡見通し断面図・平面図（1：20）

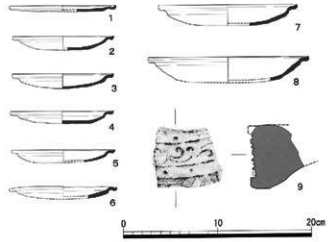


図14　出土遺物実測図（1：4）

Ⅳ-1　史跡名勝 嵐山　No.44

1　調査経過

調査地は，桂川の左岸，嵐山小学校の南側で駐車場として利用されている広い敷地であり，住所は右京区嵯峨柳田町35，35-44になる。当該地は，応永33年（1426）の『山城国嵯峨諸寺応永鈔命絵図』[1]によると，真浄院や慈済院といった寺院が描かれており，現在でも天龍寺内に移った慈済院が所有している。

敷地の現況は，北半が低く，南半が高い地形をしており，この南半の高まりが旧地形，例えば桂川の土手等を反映している可能性があった。このような場所に，集合住宅建設及び宅地造成計画がなされたため，旧地形の確認と中世寺院の遺構を確認する目的で，平成15年7月10日，11日の両日に試掘調査を実施した。合計6箇所の調査区を設定し，調査面積は77㎡となった。

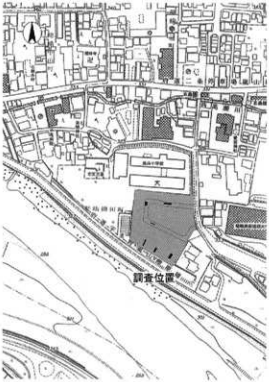


図15　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

設定した6箇所の調査区の内，南半の4区から6区は，それぞれ現地表下2.9m，4.25m，2.95mまで大量の産業廃棄物が投棄されていた。4区と6区では流水の影響で堆積したと考えられる締まりの良い黄褐色系の砂層を廃棄物層の下位で確認することができた。

また，敷地北半に設定した1区から3区でも，現地表下1.9m前後まで産業廃棄物が投棄されていたが，その下層には中世から近世にかけての整地層を3層から4層確認することができた。

整地層1　2区及び3区で確認した厚さ30cmの明黄褐色泥砂層であり，近世の瓦片を含む土壙がこの層上で成立している。また，この層上の別の土壙中から伏見人形がまとまって出土した。

整地層2　1区から3区で確認した厚さ40cmから50cmのにぶい黄褐色泥砂層で，3区では上下2層に分かれる。須恵器，土師器，瓦，塼等の小片を確認した。

整地層3　1区から3区で確認した厚さ25cmから30cmのにぶい黄色細砂層で，土師器小片や瓦片を含み，2区では直径60cm，深さ35cmの礎石据付穴1基を確認した。

整地層4　黄褐色泥砂の地山の直上に厚さにして10cm程度存在する締まりのある灰褐色泥砂層で，1区でのみ確認できた。溝1及び柱穴2はこの整地層上面で成立している。

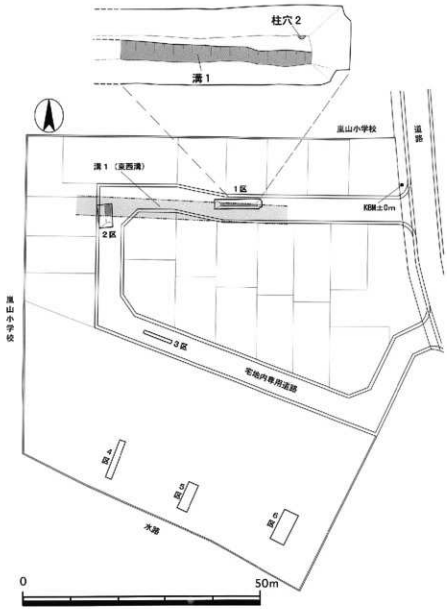
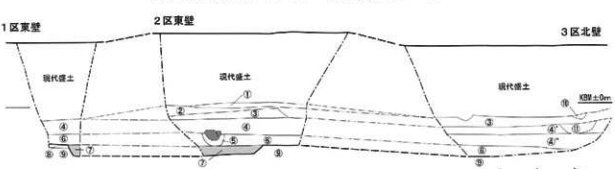


図16　調査区位置図（1：800）・遺構平面図（1：100）



① 2.5YR/6　明黄褐色砂泥
② 7.5GY6/1　緑灰色泥砂（樹脂作土）
③ 2.5YR/6　明黄褐色泥砂（砂質強い）：整地層１
④ 10YR5/3　にぶい黄褐色泥砂（土器小片、小礫多く含む）：整地層２
④′ 2.5Y4/4　オリーブ褐色泥砂（砂質強い）
④″ 10YR4/3　にぶい黄褐色泥砂（瓦片、土師器、小礫を含む、締りなし）
⑤ 2.5Y5/2　黄褐色泥砂（礫石囲付穴埋土）
⑤ 2.5Y6/4　にぶい黄色細砂（遺物小片含む）：礫石囲付穴成立面：整地層３
⑦ 2.5Y4/2　暗灰黄色泥砂（土師器小片含む）：溝１埋土
⑧ 7.5YR5/2　灰褐色泥砂（やや固い）：整地層４
⑨ 7.5YR7/8　黄褐色泥砂：地山
⑩ 2.5Y4/3　オリーブ褐色泥砂（江戸時代の瓦片含む）
⑪ 2.5Y4/6　オリーブ褐色泥砂

図17　土層断面図（1：100）

溝1　1区及び2区で確認した東西方向の溝で，幅約4m，深さ30cmを測り，断面の形状は台形様である。暗灰黄色泥砂の埋土中から，時期は判別しがたいものの土師器皿，青磁，陶器，瓦質土器の小片が出土している。

写真5　1区溝1検出状況（西から）

3　遺　物

1は土師器皿で，整地層1から出土した。2は揺り鉢の可能性があるが小片のため，確認できない。口縁部が短く折れ曲がるタイプで，整地層2から出土した。

3から5は，伏見人形の狐で，お稲荷さんの使いであることから「眷属さん」とも呼ばれる[2]。いずれも型作りで，狐本体と台座からなり，左右別々の型に粘土を貼り付けた後，接合している。人形の表面は型と人形の剥離を容易にするための雲母が付着しており，いずれも頭部と尾部を欠いている。

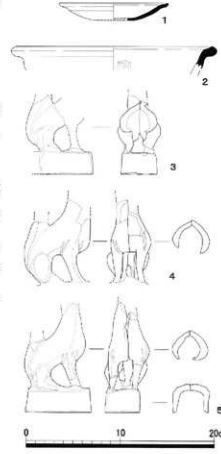


図18　出土遺物実測図（1：4）

4　まとめ

調査の結果，現在の地形は昭和以降に行われた産業廃棄物の投棄の結果，生じたものであり，元来はほぼ同一レベルの平坦な敷地であったと考えられる。

溝1は，東西方向に最低でも32m以上続いており，幅が4mであることからも，単なる一寺院内の排水溝等ではなく，寺院境界等の機能を有していた可能性がある。しかし，溝の直上に礎石据付穴が構築されていることから，中世後半には境界としての機能を必要としなくなったことも考えられる。

（馬瀬智光）

註

1）高橋康夫　『京町屋・千年のあゆみ－都にいきづく住まいの原型－』（学芸出版社　2001年）の91頁に所収。

2）奥村寛純　『伏見人形の原型』（丹嘉　1976年）

Ⅳ-2　法勝寺跡　No.12

1　調査経過

調査地は，京都市左京区岡崎法勝寺町の京都市動物園内である。この度，京都市動物園がカンガルー舎を壊して，新たにサル舎を建設することを計画した。動物園の敷地は，町名からも分かるように平安時代後期に白河法皇が造営した六勝寺の中の筆頭寺院，法勝寺の境内と重なっている。法勝寺の遺跡としては，動物園の北方，二条通を挟んだ北側の屋敷地に金堂の基壇が残存し，園内にもかつて八角九重塔の基壇が残っていたが，敗後の昭和21年，駐留軍が動物園の南半部を接収するに際して，土壇は削り取られ地上から消滅している。今回の工事場所は，この八角九重塔の東方に位置しており，この塔が金堂前面の池内の中島に造営されたと想定されていることから，園池などの存在が予想される場所であった。

申請時点ではサル舎は，まだ基本計画の段階で，基礎形状や基礎掘削深度などは未確定であったが，遺構の有無を把握することを目的として，カンガルー舎の西側と南側を対象に試掘調査を平成15年２月24・25日に実施した。

その結果，カンガルー舎の西側を調査した１・３・４トレンチにおいて現地表面から約1.9m下層で10～20cmほどの厚みをもつ灰色泥土の堆積を認めた。この灰色泥土の上面からは平安時代

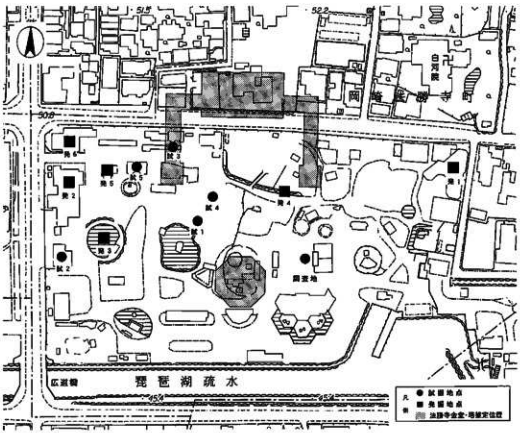


図19　調査位置と既往調査位置　（1：2,500）

後期の瓦類が出土し，掘削中の残土からは泥塔2基が出土したことから，八角九重塔の周りにあったとされる池の堆積土の可能性があると判断した。このため，この灰色泥土の広がりを調べるためにカンガルー舎の南側も調査（2トレンチ）したが，2mほど掘り下げて白川の砂礫堆積を認めただけであった。

これらの調査成果から，平成15年度建設のサル舎については，基礎掘削が泥土層に達しないような基礎形状になるよう，資料をつけて動物園側に要望し，遺構保存に配慮した実施設計が営繕課によって行われた。

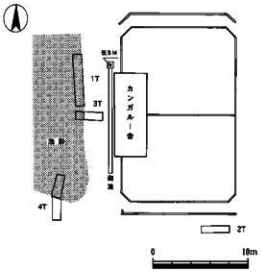


図20　トレンチ位置図（1：400）

2　遺　構

1・3・4トレンチの層序について概説するが，これらのトレンチは，近接した所を調査したため，その層序もよく似ている。現地表面から約1.4mまでは，近代の盛土層と近世の黒褐色土（耕作土）であり，その下層には40～50cmの厚みで褐色系の泥砂が整地層として認められる。この整地層の下に，池埋土の暗オリーブ色砂泥と池内堆積土と考えられる灰色泥土が10～20cm堆積し，さらにその下が灰色もしくは褐色の砂泥となる。4トレンチの南半部では，地山である白川砂の黄色細砂が認められたが，北に向かって落ち込み，池内堆積に変わる辺りから褐色砂泥に変わる。4トレンチ以北の1・3トレンチでは，白川砂の堆積は，掘削した範囲内では認められなかった。

池　跡　カンガルー舎の西側を調査した1・3・4トレンチで灰色泥土を検出したことにより，これを池内堆積土と推測した。1トレンチ内は全面に灰色泥土が10～15cm堆積していることから，全体が池の中と考えられる。また，その南側を東西方向に掘った3トレンチでは，ベースとなる灰色砂泥が東から西に向かって僅かに落ち込み，その下がったトレンチ西端付近に灰色泥土が認められ，さらにその上に暗オリーブ色泥土が全面に薄く堆積している状況であった。4ト

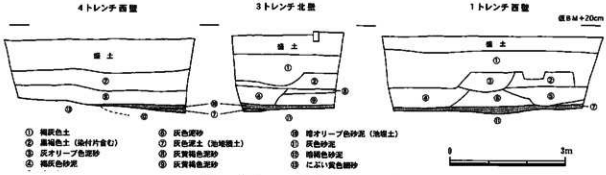


図21　各トレンチ土層図　（1：100）

レンチでは，ベースとなる暗褐色砂泥が北に向かって緩やかに落ち込み，3トレンチと同じ灰色泥土とその上に暗オリーブ色砂泥が堆積している状況であった。このことから，3・4トレンチでは，池の汀部分を検出したと考えている。ただし，洲浜のような石を敷き詰めた化粧護岸はなかった。

3　遺　物

1・3・4トレンチからは，丸瓦や平瓦などがコンテナに3箱分出土した。図22の1・2はそれぞれ1・3トレンチの調査中に上げ土から採取した土製緑釉円塔である。1は直径6.5cm，厚さ0.7cmの円盤上に直径が4.5cm，頂部がやや扁平な半球状の塔身を付けたものである。胎土は精良で焼成はやや軟質，肌色を呈し，底以外に淡緑色の施釉が認められる。2は1のような円盤が無く直径が5.5cmの半球状塔身のみの円塔である。3は，五輪塔を平瓦凹面に型押しした瓦製印塔である。塔身内には，梵字の「丆」？を入れる。

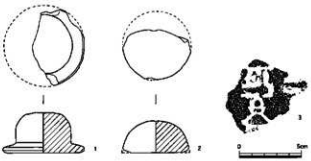


図22　円塔実測図及び瓦製印塔拓影　(1：3)

4　まとめ

京都市動物園内では，今回の調査を除いて過去に試掘調査を5カ所，発掘調査を6カ所で実施している。(図19参照) この内，法勝寺に関連した遺構が発見された例は比較的少なく，発掘調査では，爬虫類館建設に伴う園内最初の調査（図19中の発1地点）で池の汀を検出している。また，試掘調査では休憩所建設地（図19中の試2地点）で，一辺が20cmほどの礎石1個と溝状遺構を検出している程度である。特に近年の試掘調査では，既存施設の隙間にトレンチを設けるといった小規模なトレンチ調査が主体で，なかなか検出した遺構の性格まで明確に出来ていない。今回の調査も同様で，検出した池跡が八角九重塔の周りにあったとされる池に該当するのか確証は無いが，推定塔跡の近くであること，全く新しい時代の池跡でもないことからその可能性は低くはないと考えている。今後も園内の調査事例を増やして，既に地上から消えてしまった塔跡の位置や池の広がりを明確にする必要がある。

（長谷川　行孝）

註

1）木村滝三郎ほか「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査報告」（京都市文化観光局『京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ』1975年）

2）小森俊寛「13　白河街区3」（(財) 京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』1988年）

Ⅳ-3　伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡　No.57

1　調査経過

調査地は，伏見区桃山町金森出雲３番25で，御香宮神社の西側に位置している。ここに宅地造成が計画されたため，平成15年５月26・27日の２日間にわたって試掘調査を実施した。埋蔵文化財の包蔵地としては，縄文土器の散布地である金森出雲遺跡，奈良時代から平安時代の御香宮廃寺跡及び桃山時代から江戸時代初頭の伏見城跡の３遺跡が複合する地域である。地名にもなっている金森出雲は，伏見城が廃城されるまで，当該地付近に金森氏の大名屋敷があったことに由来する。

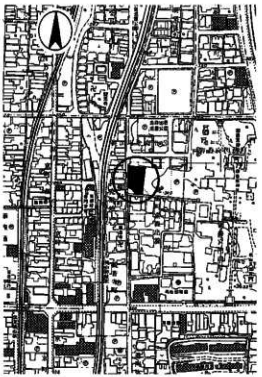


図23　調査位置図（1：5,000）

昭和60年度に本調査地の北隣りにおいて宅地造成に伴う発掘調査を行っている[1]が，そこでは桃山時代から江戸時代初頭期の門跡，石組み井戸，溝などを検出している。門跡は焼土に被われているため，火災により焼け落ちたものとみられるが，礎石なども検出されており，極めて良好な遺存状態であった。これらの遺構の内，門跡の西側を南北方向に通る２条の溝が今回の敷地にまで及んでいることが想定された。なお，周辺の地形は西から東に行くに従い高くなっており，調査地の敷地東端と西端とでは２ｍ程の高低差がある。

試掘トレンチは斜面に直行する形で東西方向に４箇所設定した。その内，１トレンチと２トレンチは南北溝の検出を想定したものであるが，この両トレンチともに北側隣接地からの延長と判断される南北方向の溝２条を検出した。３トレンチ及び４トレンチは敷地東半部の地形的に高い箇所に設定したトレンチで，この両トレンチでは東から西側へ急激に落込むラインを確認している。３トレンチではこの落込む所に何らの施設も認められなかったが，４トレンチについては，石組みの階段が検出され，本敷地においても北側敷地同様に屋敷跡などの遺構が続いていることを確認することができた。

なお，今回の試掘調査は，宅地造成計画に伴って実施したものであるが，掘削深度は遺構面まで達しないものであるため，調査終了後は埋め戻して地中にその遺構を保存した。

2　遺　構

検出した主な遺構は，南北方向の溝2条（１・２トレンチ），土壙１基（３トレンチ），階段遺構（４トレンチ）などがある。各トレンチの層序は，１・２トレンチがほぼ同様で，耕作土の下

層に暗褐色の泥砂層がトレンチ西端で40cm，東端では75cmの厚さで堆積している。この泥砂層は地形的に低い敷地西半部における整地層とみられるが，遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。地山はこの整地層の下層で検出される褐色系の砂礫層である。トレンチ西寄りでは地山と整地層の間に地山の礫が混ざった暗赤褐色泥砂層が薄く堆積する。南北方向の溝２条はこの地山を切り込んで造られている。敷地東半部の標高の高い場所に設定した３・４トレンチでは，西側へ急激に落込む傾斜地をなだらかにするために褐色系の砂泥層・泥砂層から成る整地層が堆積している。３トレンチでみた場合，この整地層の堆積は大きく3層に分層されるが，出土遺物は無かった。また，４トレンチでも階段遺構の上面に堆積するにぶい黄褐色粗砂層やその上層のにぶい褐色泥砂層から江戸時代の瓦片が少量出土する程度であった。３トレンチの地山は，黄褐色の礫混砂泥層で，浅いところでは地表下30cm程の深さで検出され，トレンチ中央付近で西側へ急傾斜で落込んで，１・２トレンチへとつながる。

溝１・２　規模は西側の溝１が幅65cm，深さ10cm。東側の溝２が幅1.8m，深さ40cmである。この２条の溝は門跡と平行して掘られた南北溝で，当敷地にまで続いていることを確認した。溝１に比べ溝２の幅がかなり広いが，この溝２は北側から徐々に幅を広げて南流し，１トレンチ付近で最大幅になる。溝の埋土は，褐色系の砂泥層あるいは泥砂層を主とするもので，西側の溝１には地山の小礫が多く含まれていた。

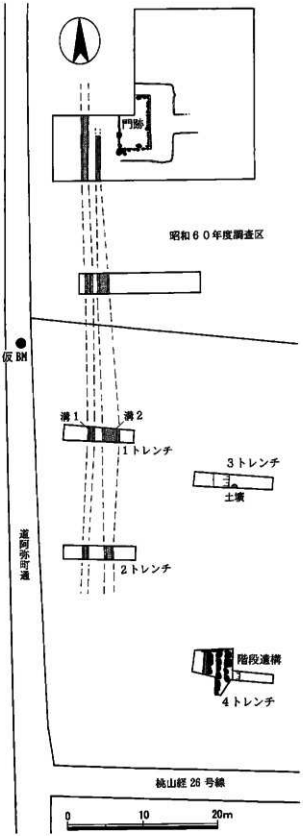


図24　トレンチ位置図（1：500）

土壙　地形が東から西へ急激に落込む肩口に掘られた土壙である。完掘していないため，深さは不明であるが，直径は55cmを測る。埋土は暗褐色砂泥層に小礫が混ざったものであるが，遺物が

出土していないため時代の確定はできなかった。

階段遺構　今回の調査で注目されるのは，４トレンチにおいて階段の遺構を検出したことである。この階段遺構は石組みのもので，踏石にも階段側壁にも割り石や自然石を使用した，いわゆる乱石積階段である。東西方向に昇り降りする階段で，トレンチ北端で側壁を確認している。階段規模は，段数が３段で，１段目の踏石外面から３段目踏石の踏面東端までの長さが2.25m，階段幅は北側壁の南面から3.8mまでを確認した。１段目下の階段前面には排水施設とみられる幅30cm程の浅い溝が掘られている。試掘トレンチ内で検出した各段の石材の数は，１段目４石，２段目６石，３段目４石までを確認しており，石材には主に花崗岩を使用していた。２段目だけが６石を数えるのは，調査の最終段階で，確認のための拡張を行ったためであるが，南側壁は確認されておらず，階段の幅はさらに南へと広がっている。北側壁には幅１m大の主要な石材が２石遺存している。その２石の接点にははめ込み石が残っているが，上部の石材が欠損しているため逆三角形の空間ができている。階段の踏石に使用された石材の大きさは，小さいものでは２段目の側壁から３石目のものが幅60cm，奥行き50cm，高さ40cm程であり，大きいものでは，３段目の側壁から２石目の石材が，幅70cm，奥行き80cm以上，高さ45cmを測る。

写真６　２トレンチ溝検出状況（東から）

写真７　３トレンチ落込み検出状況（東から）

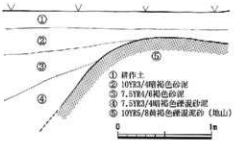


図25　３トレンチ北壁土層断面図（1：40）

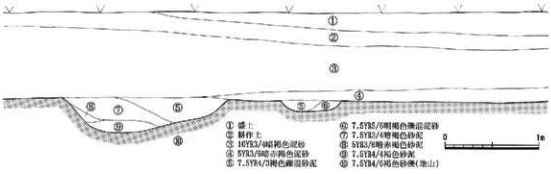


図26　１トレンチ南壁土層断面図（1：40）

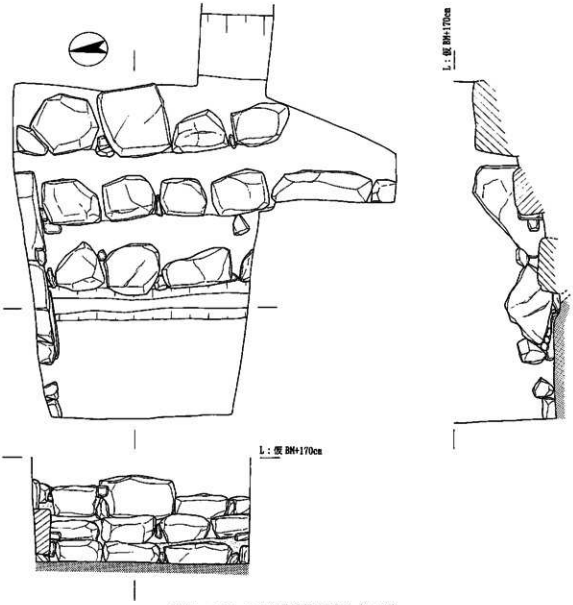


図27　4トレンチ階段遺構実測図（1：40）

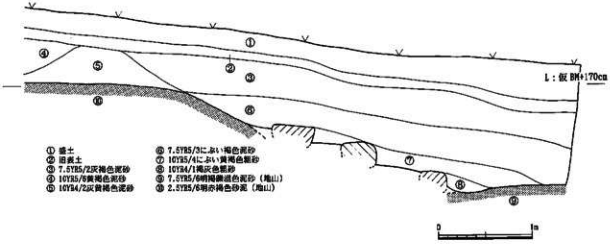


図28　4トレンチ南壁土層断面図（1：40）

踏石の垂直部である蹴上げの高さは，1段目20cm，2段目30cmであるのに対し，3段目は25cmから45cmと不揃いであった。また，各段の踏み面は1段目75～80cm，2段目65～75cmで，3段目はまだ斜面が若干上へ伸びるものの，検出された石段としては，この3段目が最上段であった。1段目の下から3段目の踏面までの高さは70cm程であるが，斜面最上部までだと1.1mを測る。なお，4段目の石材を抜取ったような痕跡は調査範囲では確認されなかった。

写真8　階段遺構（南から）

写真9　階段遺構（東から）

3　遺　物

今回の試掘調査で出土した遺物は極めてわずかであり，各遺構の時期を確定するには至っていない。主要な遺構である階段部分でも，その上面に堆積するにぶい黄褐色粗砂層及びその上層のにぶい褐色泥砂層から江戸時代の瓦片が少量出土する程度である。また，そのさらに上層の灰褐色泥砂層からは，近世遺物に混じって，平安時代の瓦片も数点出土している。

4　まとめ

今回の調査では，南北方向の溝2条と，階段遺構を検出することができた。この溝は，北側隣接地の調査において，門跡の西側で検出された溝の延長上に位置するものである。出土遺物からみて，門跡と溝はともに桃山時代から江戸時代初頭期，すなわち伏見城が存続していた時期の遺構と考えられている。今回の調査で検出した2条の溝については，出土遺物が無いため，時期の確定はできないものの，北側からの延長であることは明らかであり，同時期のものと考えられる。また，4トレンチで検出した階段遺構についても，階段を覆うように堆積している粗砂層やその上層の泥砂層から出土する少量の瓦片だけでは決めがたいものの，当該地を含め，付近一帯は，伏見城が破却された後は，その大部分が畑地化している状況から考えて，北側で検出された門跡と同時期のものとみて大過無いものと思われる。

（北田栄造）

註

1）原山充志・小森俊寛「伏見城跡2」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1988年）

Ⅳ-4　唐橋遺跡　No.60

1　調査経過

調査地は，御前通と国道171号線（現・九条通）の交差点を北上した地点である。唐橋遺跡のほぼ中央に位置し，また，敷地の北辺が平安京の南辺とほぼ一致している。平安時代の初頭には，当該地のすぐ北側を九条通が東西に走り，その向こうには右京九条一坊九～十六町にわたって存在した西寺の塔が聳えていたはずである。唐橋遺跡の調査例は少ないが，当該地西側にある市立洛陽工業高校の敷地内において過去２度の発掘調査を実施しており，平安時代の掘立柱建物，古墳時代の竪穴住居，弥生～古墳時代の流路等，多数の遺構を検出している[1]。

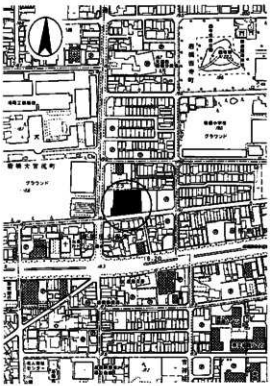


図29　調査位置図（1：5,000）

今回，ここで分譲用宅地開発を行う計画が届け出られたため，2003年8月4日に試掘調査を実施し，古墳時代後期～飛鳥時代を中心とした多量の遺物と，土壙その他の遺構を検出した。このため，事業主の理解と協力を得て，9月26日～10月3日の1週間試掘調査を延長し，遺構の検出と記録を図った。

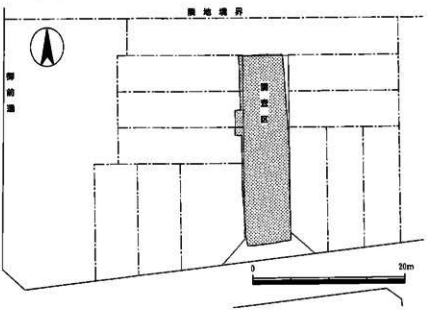


図30　調査区位置図（1：500）

調査は，工事の掘削が遺構面に及ぶ宅地内道路部分，約125㎡を対象とした。流路・土壙・杭列などを検出し，また竪穴住居の一部を認めたため，この部分を拡張し，調査を行った。

2　層序と遺構

層序　現地表から-15cm前後までが当該地が畑であったときの耕作土，-20cmまでこれに伴う床

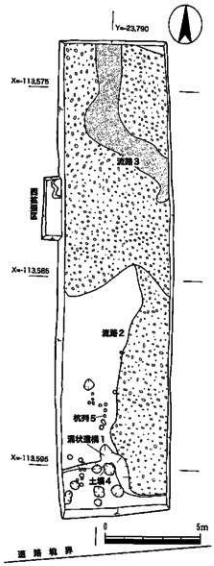


図31　遺構平面図（1：200）

土があり，その下は黄灰色泥砂の遺物包含層（③層），次いで遺構面である灰黄褐色泥砂層（⑫層）というのが調査区の基本層序である。しかし，遺物包含層は主に調査区南半に偏在し，調査区北端付近では灰黄褐色泥砂層（④層）が遺物包含層に代わって堆積している。また，後述するように調査区を縦横に流れる流路跡は部分的に床土直下でも存在し，紙幅の都合で図示できないが，調査区東壁においては壁面のかなりの部分を砂礫の氾濫堆積が占めている。

遺物包含層　先述のとおり③の細礫混黄灰色泥砂層の泥砂層で，層の下面はアップダウンが激しい。層と捉えるよりむしろ土壙状遺構の埋土とするべきかもしれない。均質な土で，多数の遺物を包含しており，今回出土した遺物の大部分はこの層からのものである。破片は大きなものが多く摩滅も少ないが，接合するものもまた少ない。遺物の年代は6世紀後半～7世紀初頭を中心とし，平安前期のものを若干含む。土取穴を近在の遺跡の土で埋めたものかとも考えたが，調査区内の土が採掘するだけの良質なものとも思えず，形状も不自然で，結局その性格は捉えきれなかった。

溝状遺構1　調査区南端で検出した。流路2を切って成立する，深さ20cm未満の浅い落ち込みである。③層と同色同質の③'層を埋土とするが，③'層の上面で一度表土化した痕跡があり，上層と区別できる。

流路2・3　ともに砂・細礫・礫・泥砂等の互層から成る氾濫流路で，南流する流路2を南西流する流路3が切っている。流路3の砂礫層は，調査区東壁ではGL-12cmほどを上面とするが，西壁では-70cmであり，当該地区ではかなりの落差をもって流れていたようである。したがって平面には，図31に示したように砂と砂礫が帯状に現れる。遺物はほとんど含まれないので年代は不明だが，流路3の上層に後述の竪穴住居が成立している。

杭列　調査区南半で，流路2に沿って検出した。検出面である⑭'層もその下層は砂礫層となっており，本来安定した地盤ではなく，中洲のような土地であったと思われる。

竈遺構（竪穴住居）　重機掘削時にベース面の認識を誤り，調査区壁面に焼土層が現れたことで認識したものである。遺物包含層（③層）の攪乱を受けていることもあって住居址の平面形は明らかにできず，竈遺構も残りが悪い。竈の支柱石を据え付ける⑦層は全体に焼土混じりで，⑨層の下面にも焼土面が広がることから，少なくとも1回の造り直しをしている。支柱石は三角柱状の砂岩で，南側から火を受けた痕跡がある。住居の床には砂礫（⑧層）を薄く敷いた後，砂泥（⑥層）の床を貼っている。⑬は柱穴の可能性がある。

3　遺　物

出土遺物には，土師器・須恵器を主として，他に緑釉陶器・瓦等が僅かにある。そのほとんどは遺物包含層（③層）からの出土で，竈遺構周辺からもまとまった数の遺物が出ている。主だったものを以下に述べる。

須恵器　出土した須恵器はほとんどが蓋杯で，それ以外の器形は少ない。10が溝1から，4・9が土壙4から，7・8が竈構築土中（⑨層）から出土し，それ以外は遺物包含層（③層）から出土した。いずれも6世紀後半のものである。20は横瓶で竈の前面を中心に出土した破片が完形の1/3ほどまで接合した。

土師器　1は須恵器杯蓋を写したもので，頂部はヘラケズリせずにユビオサエをそのまま残す。廃土中より出土。13は壺で，調査区南半の遺構面上から出土した。15は甕。溝状遺構1出土。14は住居址の床面上で検出したもので，歪みのある小片のため器形が復原しづらいが，鉢形を呈すると思われる。16・17は甑である。16は竈前面及び住居址床面から出土したもので，全周

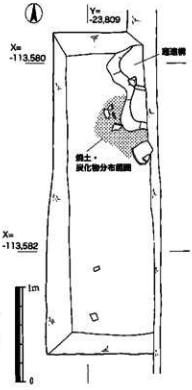


図32　西拡張区遺構平面図
(1：40)

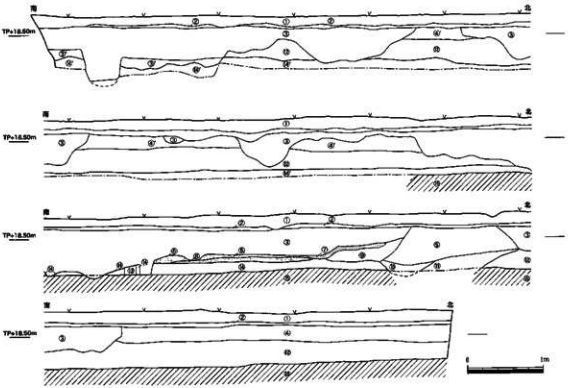


図33　調査区西壁土層図（1：50）

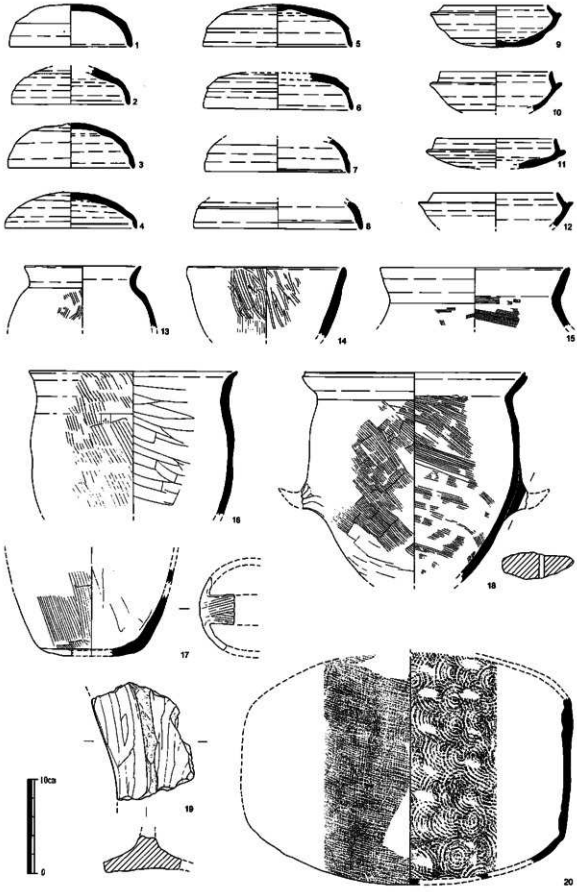


図34　出土遺物実測図（1：4）

の1/4ほどの破片のため把手の位置等は不明である。17は西拡張区の耕土層から出土。2孔タイプまたは半月孔タイプと呼ばれるものである[2]。18は住居址の東側遺構面上で検出した甕である。胴部中位に把手を付けるが，その中央にスリット状の切り込みを薄板状の工具で入れているのが特徴的である。

その他　19は移動式竈である。焚口に向かって右側の部分の破片で，いわゆる庇の付くタイプである。包含層廃土中から出土した。

写真10　西拡張区・遺構穴掘状況（南西から）

4　まとめ

今回の調査の主な成果としては，氾濫流路から集落への変化を確認したことと，唐橋遺跡で初めて明確な造り付け竈をもつ住居を検出したことが挙げられる。今回の成果を，洛陽工業高校内の調査成果と比較してみると，遺構成立面の下層が旧流路の砂礫層で，その直上に古墳時代の集落が展開していることは共通しており，水はけの良い土地を選んで集落が営まれたことを推測させる。ただし，後者の出土遺物が5世紀末～6世紀初頭を中心とするのに対して，今回調査地では6世紀後半が主であり，居住域の変化があるのかもしれない。また，高校構内では平安時代の遺構が多数検出されているのに対して，京外に当たる今回調査地では，削平の可能性もあるとはいえ，平安以降の遺構が全く認められないことも興味深い事実である。

（堀　大輔）

註

1）堀内明博・梅川光隆「平安京右京九条二坊」（(財) 京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1988年）

2）杉井　健「竈の地域性とその背景」（考古学研究会『考古学研究』第40巻第1号，1993年）・鍋田　勇「山城・丹波地域出土の甑式系土器と甑」（(財) 大阪府埋蔵文化財協会『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2，1994年）

Ⅳ-5　中久世遺跡１　No.66

1　調査経過

調査地は中久世遺跡の北西端に近い一角で，近年まで駐車場および宅地として利用されていた敷地である。周辺では，弥生中～後期の大型溝[1]や中期の方形周溝墓，後期の竪穴住居[2]，古墳時代の竪穴住居，飛鳥～奈良時代の掘立柱建物[3]などが，地表直下から検出されている。今回，ここに工場の新築が計画されたことに伴い，試掘調査を実施した。

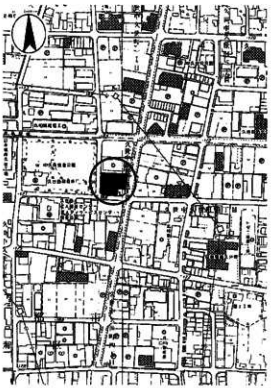


図35　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

調査は南北方向のトレンチを１本設けて行った。層序は極めて単純で，アスファルト下に60～70cmの現代盛土があり，その下に旧耕土，明黄褐色砂泥層と続く。この明黄褐色砂泥層を地山と判断し，その上面で遺構検出を行ったが，時期不詳の耕作溝が検出されただけであった。そこで，調査の終了間際にトレンチの北端で部分的な断ち割りを行ったところ，下層で竪穴住居跡らしい遺構を検出し，当初地山と考えた層はその上位堆積層であることが判明した。断ち割りで判明した遺構面は仮ベンチマーク-70cmで，上層の明黄褐色砂泥層がほぼ水平堆積することから，この遺構面も敷地内ではほぼ高低なく存在すると予想される。しかし，時間的制約から面的な追跡をすることができず，遺構密度などは不明である。なお，仮ベンチマークは敷地東側歩道上のマンホールにおいた。

竪穴住居跡は，狭い断ち割り部分で断面観察によって確認したため，平面プランをはじめ詳細は明らかでない。断面には赤変した斜めの層が観察され，造り付けの竈であると思われる。また，この斜め堆積の赤色土層の下層にも赤変した面と炭層があり，これが竈の床面になるようである。竈をもつことからこの住居は古墳時代後半期のものと考えられ，住居本体は北に展開し，その南辺に竈が造られていると思われる。なお，断ち割りの範囲内では，住居に伴う遺物は認められなかった。

3　まとめ

中久世遺跡においては，これまで数多くの調査が行われてきたが，遺物の出土例に比して顕著な遺構の検出例が少なく，未だ居住域・墓域・耕作域といった集落構造の解明には至っていない。

そのような状況下にあって，調査地周辺において遺構検出例が蓄積されつつあることは注目すべき成果であり，今回，断片的ながらこれに一例を追加できたことになる。今回の工事計画について発掘調査を実施することはできなかったが，事業者側と協議した結果，建築に当たっては，地盤を柱状改良して基礎自体は浅くとどめることにより，遺構の破壊面積を最小限に抑える配慮を得た。

（堀　大輔）

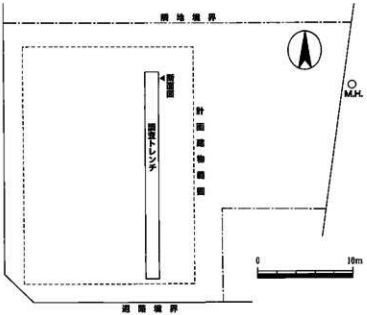


図36　トレンチ位置図（1：400）

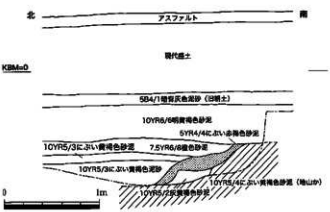


図37　トレンチ北端断割り東壁土層図（1：40）

註

1）上村和直『中久世遺跡発掘調査概報 昭和61年度』，京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所，1987年

2）長谷川行孝「中久世遺跡」（京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成３年度』，1992年）

3）出口　勲「中久世遺跡」（京都市文化市民局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡発掘調査概報 平成11年度』，2000年）

Ⅳ-6　中久世遺跡２　No.67

１　調査経過

調査地は，国道171号線と西国街道の交差点から南へ約100mのところにあり，南区久世殿城町155，156，157の一部に位置する。当該地は，弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である中久世遺跡のほぼ中央部分にあたる。

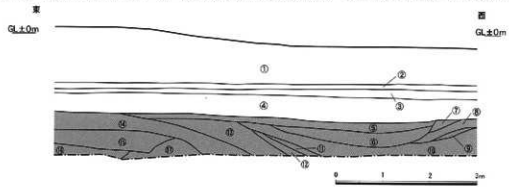
既往の調査から，当該地は２本の旧流路の間にある微高地もしくは中州と考えられており[1]，店舗建設に先立ち，平成15年11月19日に試掘調査を実施した。調査面積は32㎡で，設計変更により，遺構の保存が図られた。

図38　調査位置図（1：5,000）

２　遺　構

調査区の基本層序は，道路境界に設定した仮ベンチマーク（KBM）から-103cmまで現代盛土，同-117cmまで旧耕作土，同-126cmまで床土，同-170cmまで中世の遺物を含む灰オリーブ色粘土層と続く。この中世の遺物包含層の下方から重機の掘削可能深度であるKBM-260cmまで，大規模な流路の埋土を確認することができた。

流路跡　調査区全体に広がり，流路内の埋土の堆積状況から大きく西に向かって傾斜している。



① 現代盛土
② 旧耕作土
③ 床土
④ 5Y4/2　灰オリーブ色粘土（中世整地層）
⑤ 7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土（流路埋土）
⑥ 7.5Y2/2　オリーブ黒色粘土（流路埋土）
⑦ 5Y2/1　黒色粘質土（流路埋土）
⑧ 2.5Y3/1　黒褐色粘質土（流路埋土：弥生土器）
⑨ 7.5Y4/2　灰オリーブ色粘土（流路埋土）
⑩ 10Y3/1　オリーブ黒色砂（流路埋土）
⑪ 7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（流路埋土：弥生土器）
⑫ 7.5Y2/2　オリーブ黒色細砂（流路埋土）
⑬ 5Y2/2　オリーブ黒色細砂（流路埋土）
⑭ 5Y2/2　オリーブ黒色粘土混じり細砂（流路埋土：杭，弥生土器）
⑮ 7.5Y3/1　オリーブ黒色砂混じり粘土（流路埋土）
⑯ 10Y3/1　オリーブ黒色粘質土（流路埋土：弥生土器）
⑰ 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂（流路埋土）

図39　土層断面図（1：80）

この流路堆積中では比較的多くの弥生土器が出土した。特に⑭層のオリーブ黒色粘土混じり細砂からは，大量の弥生土器片とともに４本の杭材を検出した。検出した４本の杭材はいずれも先端部分が円錐状に加工されており，直径は６cmから10cm，長さは短いもので40cm，長いもので165cmに達する。いずれの杭材も現位置に存在していたとは考えられないが，土器の破片に摩耗が少ないことから，すぐ近くに護岸ないしはしがらみ状の遺構が存在していたとみられる。

3　遺　物

２と４は⑪層のオリーブ黒色粘質土から，他は⑭層のオリーブ黒色粘土混じり細砂層から出土

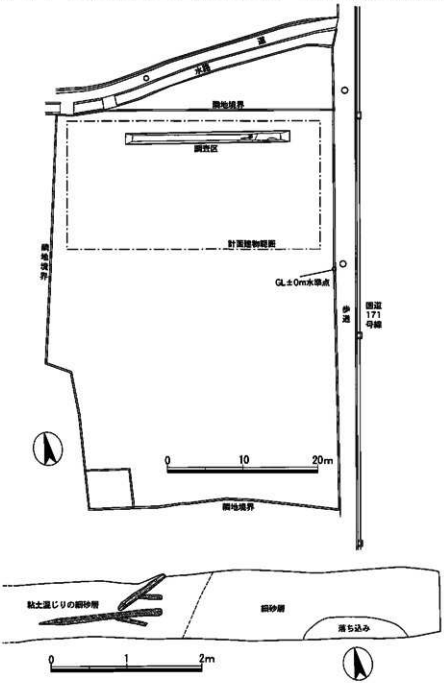


図40　調査区位置図（1：500）・遺構平面図（1：50）

している。

1は口縁部の内外面ともミガキが施され，頸部に2本の沈線が巡り，その下方には波状文も認められる。

2～4は底部の破片であり，2及び3は壺の底部でいずれも外面に叩きの痕跡が明瞭に残っている。4は受口状口縁をもつ6と同タイプの鉢形土器の底部と考えられ，外面が磨かれている。

写真11　杭材検出状況（西から）

5は小型の甕の口縁部で，6は受口状口縁をもつ鉢形土器である。6は口縁部を刺突文，体部を櫛描直線文と列点文で飾っている。

また，7は高坏の脚部で縦方向のミガキが施され，脚端に2本の太い沈線が巡らされている。

いずれも弥生時代後期のものと考えられる[2]。

4　まとめ

調査の結果，当初の予想とは異なり，微高地や中州ではなく，大規模な流路中であることが確認できた。この流路は弥生時代に何度も氾濫と堆積を繰り返したらしく，粘質土層と砂層が交互に認められる。

大量の弥生時代後期の上器が摩耗の痕跡が少ない状態で検出されることから，近接地に当該期の集落が存在すると考えられる。

（馬瀬智光）

註

1）出口　熊　「中久世遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』（京都市文化市民局　2000年）の38頁の復原図。

2）森岡秀人　「山城地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ』（木耳社　1990年）

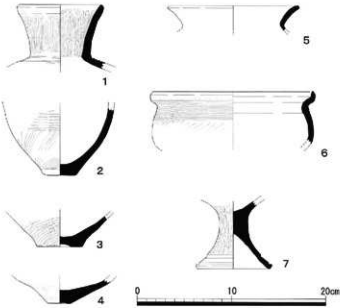


図41　出土遺物実測図（1：4）

Ⅳ-7　長岡京跡・淀城跡　No.17

1　調査経過

調査地は，伏見区淀本町の京阪電鉄本線淀駅である。当該地は，元和９年（1623）の伏見城破却に伴い，徳川二代将軍秀忠が山城警護を目的として松平定綱に築城させた淀城跡に含まれる。今回，京阪本線の淀駅移転と高架化工事が計画されたことに伴い，淀城に関連する遺構の検出を目的として平成15年２月17日，11月10日，13日の３日間にわたって試掘調査を実施した。設定した４箇所の調査面積は合計22㎡であった。

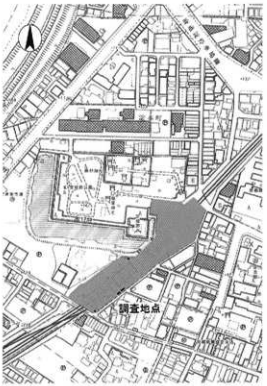


図42　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

高架化工事に先立ち，原因者が地中レーダー探査を行った結果，石垣らしき反応の得られた道路の隣接地に１区，２区の２箇所の調査区を設定した。

また，仮設鉄柱を建てるために直径2.4mの円形縦坑が計画されたが，その内の２箇所について，３区，４区として調査を実施した。調査の結果，石垣３箇所，土壙１基を検出することができた。

土壙１　１区中央，海抜10.3m付近で検出した南北1.63m，深さ0.32m，断面皿形を呈する土壙である。この土壙は現地表下0.75mの黄色砂層上面から掘り込まれ厚さ0.9mの淡黄色砂層に達している。埋土は上層から暗灰黄色砂，明黄褐色砂，黒褐色泥砂の３層からなり，三巴文軒丸瓦片や平瓦片，炭片等が最下層の黒褐色泥砂層から出土した。この土壙を含む軟弱な砂層は，近世後期の遺物を含む明黄褐色泥砂の整地層によりパックされている。

２区石垣　海抜10.7m付近で検出した，軟弱な砂層の上面に積み上げられた２段の石垣である。一辺40cmから70cmの石材を上下２段，東西方向に並べ，隙間を拳大の石で充填して造られている。石垣前面がほぼ垂直に揃えられていること，現高約80cmと低く，石垣前面の埋土も湿地状の堆積を示さないことから，堀に伴う石垣ではなく，建物や塀に伴う石垣と考えられる。石垣前面の埋土は，上から黄褐色泥砂，暗灰黄色泥砂，オリーブ褐色泥砂，灰オリーブ色シルトと続き，軒丸瓦小片を含む瓦片が暗灰黄色泥砂層から検出された。

３区石垣　海抜9.0m付近で検出された石垣で，一辺40cmから80cmの石材を積み上げ，２区石

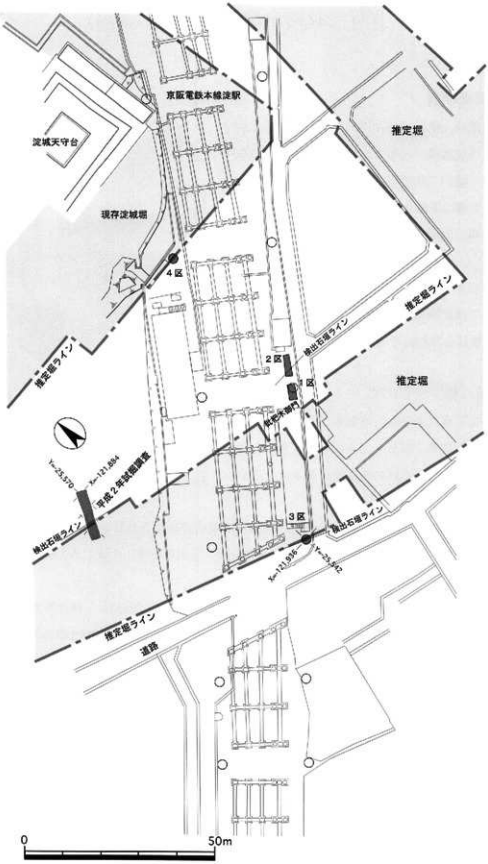
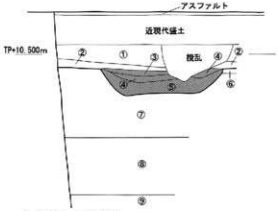
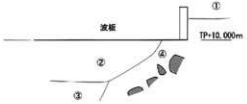


図43　調査区位置図（1：1,000）



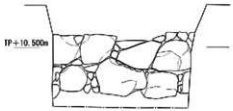
① 2.5Y7/6　明黄褐色砂
② 2.5Y6/6　明黄褐色泥砂（整地層）
③ 2.5Y4/2　暗灰黄色砂（土壙１埋土）
④ 2.5Y7/8　明黄褐色砂（土壙１埋土）
⑤ 10YR2/1　黒褐色泥砂（炭・瓦片含む：土壙１埋土）
⑥ 2.5Y8/6　黄色砂
⑦ 2.5Y8/4　淡黄色砂（灰色シルト、黄色砂を含む）
⑧ 10YR6/3　にぶい黄橙色シルト　＋　5GY7/1　明オリーブ灰色シルト
⑨ 7.5YR6/8　橙色砂泥（瓦器、須恵器片含む）

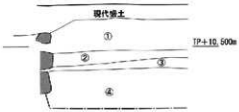
１区土壙１部分西壁土層図



① 現代盛土
② 7.5YR5/4　にぶい褐色砂（砂泥塊混じる）
③ 10GS/1　緑灰色砂（砂泥塊混じる）
④ 10BG5/1　青灰色砂

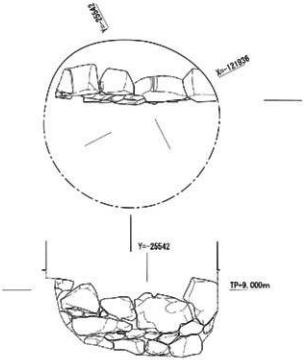
４区石垣裏込部分西壁土層図

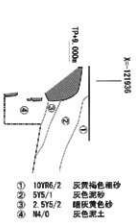




① 2.5Y5/4　黄褐色泥砂
② 2.5Y4/2　暗灰黄色泥砂（瓦片多く含む）
③ 2.5Y4/4　オリーブ褐色泥砂
④ 5Y4/2　灰オリーブ色シルト

２区石垣部分立面図（左）・２区石垣部分東壁土層図（右）





① 10YR6/2　灰黄褐色細砂
② 5Y5/1　灰色泥砂
③ 2.5Y5/2　暗灰黄色砂
④ N4/0　灰色泥土

３区石垣部分平面図（左上）
３区石垣部分立面図（左下）
３区石垣部分西壁土層図（右）

0　1　2m

図44　検出遺構図（1：50）

垣と同様に隙間を拳大の石で充填して造られている。現地表下2.8m以下という深さで検出され，石垣前面の埋土は，灰黄褐色粗砂，灰色泥砂，暗灰黄色砂，灰色泥土と続く堀状の堆積を示している。石垣の段数に関しては，調査区が狭いこともあって確認できなかったが，石垣の方向はW27°N－E27°Sで，北面している。

4区石垣　海抜10.0m付近で検出した北面する石垣の後方に詰められた裏込めである。直径10cmから40cm程度の石材で構成され，検出レベルは現地表下1.2mである。

3　まとめ

検出された石垣の淀城内での立地を確認するため，『淀の歴史と文化』に掲載されている『(淀城ノ図)』[1]を調査区位置図に重ね合わせたところ，1，2，4区は本丸の西，南，東側を「コ」字状に取り囲む郭群の南部分に位置する。この部分には侍屋敷が建ち並んでおり，外郭とは中堀を挟んで枇杷木御門によって結ばれていた。3区は中堀の南側に位置することがわかった。

4区石垣は郭の北端部分であるとともに，内堀の南岸を形成する石垣であることがわかった。2区で検出した石垣は，「枇杷木御門」と記された部分の北側にあり，御門内側の内枡形虎口の北面を形成していた可能性がある。

また，3区で検出した石垣は，中堀の南岸を形成していた石垣であり，平成2年に確認された中堀北岸の石垣[2]とともに，上記絵図の中堀部分と明確に一致している。

最後に，確認された3箇所の石垣は設計変更の上，各々土嚢袋で保護した後，埋め戻され，保存を図ることができた。

（馬瀬智光）

写真12　2区石垣検出状況（南西から）

写真13　3区石垣検出状況（北東から）

写真14　4区石垣検出状況（南西から）

註

1）西川幸治編　『淀の歴史と文化』（淀観光協会　1994年）の10頁に所収。

2）久世康博・木下保明『淀城跡（TB29）』『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都市文化観光局　1991年）

V　試掘調査一覧表

H14年度1～3月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	朱雀門跡	中京区西ノ京小堀町1-12,1-16	2003/1/22	GL-0.3mで堅く締まった地山の橙色砂礫層を検出。特に遺構・遺物は認められず。	20㎡	02K393
2	朝堂院応天門跡・紫宸殿跡	中京区聚楽廻南町25-4	2003/2/20-6/17, 19, 20-7/15	GL-1.0～1.3mで地山の明黄褐色泥砂。平安期の瓦を含む粘土採掘土壙あり。本文3頁。	26㎡	02K472

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
3	北辺二坊七町跡	上京区小川通中立売下る下小川町187-4,189-1	2003/2/21	GL-1.5m以下, 灰色砂礫層。直上まで近世の遺構のみ。	16㎡	02H477
4	三条四坊八町跡	中京区堺町通二条下る杉屋町644	2003/3/3	GL-1.7m以下, 地山。中世の土壙を検出するが, 敷地大半は近世の撹乱。	40㎡	02H423
5	四条二坊十六町跡・本能寺城跡	中京区小川通三条下る儘々町124,124-1	2003/3/5	GL-1.1mで明黄褐色砂泥の地山。中世の土壙1基検出。敷地の大半は撹乱。	37㎡	02H444
6	六条四坊六町跡	下京区堺町通五条上る俵屋町203,368,370,371	2003/2/10	GL-1.4mで六条坊門小路路面を検出。発掘調査を指示する。	57㎡	02H419

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
7	二条四坊三町跡	右京区太秦安井藤ノ木町11-1他	2003/3/24	南北トレンチの北端部で平安前期の柱穴2基を認めるが, 大半は旧建物の撹乱。	60㎡	02H532
8	五条二坊三町跡	中京区壬生東檜町14-2	2003/2/13	GL-0.5mで東西方向の溝2条, 土壙2基を検出するが, 遺構密度は希薄。	36㎡	02H447
9	七条三坊十町跡	右京区西京極南庄境町6	2003/1/29	GL-1.3mで砂礫層。遺構・遺物ともになし。	50㎡	02H382

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
10	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺造路町20-1他(京福嵐山駅)	2003/2/19	GL-0.25mで西下がりの溝状遺構検出。中世の遺か。	4㎡	14N014

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
11	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1-2	2003/3/26	GL-1.2mで砂層。遺構・遺物ともになし。	44㎡	02S504

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
12	法勝寺跡	左京区岡崎法勝寺町 京都市勤物園内	2003/2/24	GL-1.9mで法勝寺の池跡と考えられる灰色泥土の堆積を認めた。設計変更を指示する。本文15頁。	16㎡	02R460

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
13	山科本願寺跡	山科区西野離宮町16-5, 他11筆	2003/1/8	GL-2.0m以上現代盛土。遺構面はその下に遺存。基礎深度が浅く, 遺構への影響はない。	14㎡	02S414

V　試掘調査一覧表

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
14	伏見城跡	伏見区桃山町三河49	2003/2/26	GL-0.5mの地山面で素掘りの東西溝2本，素掘りの井戸状土壙3基を検出するが，時期不明。金箔瓦を含む瓦片が出土。	35㎡	02F463

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
15	中久世遺跡	南区久世殿城町50-6, 50-7	2003/1/28	GL-1m以下，灰色泥土の湿地堆積。	55㎡	02S443

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
16	長岡京跡・淀城跡	伏見区淀池上町159	2003/1/9, 10	淀城東ノ丸のものと思われる大型礎石を検出。発掘調査を指示。	25㎡	02NG422
17	長岡京跡・淀城跡	伏見区淀池上町（京阪電鉄淀駅構内）	2003/2/17・11/10, 13	GL-0.4mで武家屋敷の基壇に使用されたと考えられる石垣を検出。発掘調査を指示する。本文33頁。	22㎡	98NG303

H15年度4～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
18	大宿直跡・聚楽第跡	上京区智恵光院通中立売下る山里町238-2,238-3	2003/4/28	GL-1.4mの地山上で近世土壙を検出。	15㎡	03K035
19	聚楽第跡・聚楽第跡	上京区墓門通上長者町下る亀木町219, 220-2	2003/10/27	敷地全体が聚楽第の堀の中にあたり，GL-3mまで掘り下げるが，地山は確認されず。	19㎡	03K296
20	宴松原跡	上京区下長者町通七本松西入下る鳳凰町247-23,247-6	2003/5/9	GL-0.45mで地山。遺構・遺物ともになし。	19㎡	02K541
21	中和院跡	上京区千本通出水下る十四軒町402-2,406,408-1,408-2,408-6	2003/10/8	GL-1mで砂礫の地山。遺構面は削平されていると考えられる。	20㎡	03K193
22	豊楽院跡	中京区聚楽廻南町19－6	2003/9/22	敷地全体に石炭殻が堆積。地山（砂礫）はGL-3m。	11㎡	03K213

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
23	二条四坊七町跡	中京区堺町通竹屋町上る橋町92	2003/7/22	敷地南寄ものGL-1mで，鎌倉時代の土師器を多く含んだ土器溜まりを検出。発掘調査を指示する。	61㎡	03H104
24	四条一坊三町跡	中京区壬生御所ノ内町15,16-1,17-3	2003/9/17・10/22～29	GL-0.8m以下，湿地状堆積。中世の鎌小路北側溝検出。本文5頁。	47㎡	03H285
25	五条一坊五町跡	中京区壬生相合町13,33	2003/9/16	GL-1.0～1.3mで地山，ピット3基，土壙1基，井戸1基を検出。井戸の埋没時期は鎌倉時代。	63㎡	03H238
26	五条二坊九町跡	下京区西条堀川町262, 高野堂町387, 柏屋町6	2003/11/6	調査地のほとんどが現代攪乱。GL-2.5mで平安中期の井戸の残欠を検出。本文10頁。	112㎡	03H315
27	八条一坊九町跡	下京区和気町13-1他	2003/12/1	GL-0.9mで東西溝1条検出。敷地の大部分が現代攪乱。	50㎡	03H401
28	九条三坊一町跡・鳥丸町遺跡	南区西九条院町26-1	2003/4/1, 14	GL-1.4mで砂礫のベース面。遺構・遺物ともに顕著なものを認めず。	110㎡	02H535

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
29	二条二坊十二町跡	中京区西ノ京南上合町98-1	2003/4/3	遺路面-0.7mで平安後期の湿地状堆積（園池か）。地山上で掘立柱建物脚検出。設計変更を指示する。	42㎡	02H496
30	二条三坊五町跡・二条大路	中京区西ノ京態大寺町2	2003/7/14	GL-0.9mで二条大路北側溝と考えられる溝状遺構を検出。設計変更を指示する。	31㎡	03H168
31	三条二坊二町跡	中京区西ノ京銅駝町68	2003/6/25	GL-0.4mで平安時代前期の土壙・溝などを検出。発掘調査を指示する。	18㎡	03H100

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
32	四条四坊十五町跡	右京区山ノ内薮町27-1,27-4,27-5	2003/6/23	全体に湿地・流れ堆積。	18㎡	03H115
33	五条一坊四町跡・朱雀大路跡	中京区壬生松原町15-1, 他7筆	2003/9/10	GL-0.8mで氾濫状堆積。朱雀大路路面は認められず。	77㎡	03H252
34	六条二坊十町・十五町跡	右京区南高田町13	2003/10/6	GL-0.3mで褐色泥砂の地山。瓦等なし遺構なし。	36㎡	03H164
35	六条二坊十五町跡	右京区西院南町40-1,40-3,42-1	2003/5/19	設計GL-0.54mで六条坊門小路北側溝及び, 柱穴4個を確認。設計変更を指示する。	37㎡	03H033
36	六条三坊二町跡・西院遺跡	右京区西院寿町8, 他5筆	2003/9/1	敷地東寄りのGL-0.9～1.0mで縄立柱建物跡・溝・柱穴などが検出。発掘調査を指示する。	88㎡	03H126
37	六条三坊十一町跡	右京区西院西溝崎町4-1,4-2,5	2003/10/14	敷地東端部のGL-1.0mで幅6.7m以上, 深さ1.1m以上の大規模な南北流路を検出。出土遺物なし。	37㎡	03H328
38	七条三坊一町跡	下京区西大路花屋町西入西七条八幡町19,20,21-2,22,23,24	2003/10/1	全体に湿地・流れ堆積。GL-1mで地山。	55㎡	03H196
39	七条三坊九町跡	右京区西京極北庄境町25,26	2003/12/17	敷地の大半は河川の氾濫流域に含まれており, 恵止利小路東側溝等は認められず。	43㎡	03H443
40	七条三坊十町跡	右京区西京極南庄境町1	2003/5/7	敷地南西部を除くほぼ全域がGL-1.8～2.2mまで湿地状堆積。	57㎡	03H047
41	八条三坊十町・十五町跡	右京区西京極中沢町18-25, 20-2, 下沢町1-1,3,4,15-1,15-2	2003/6/12	GL-1.9mで河川の氾濫を示す砂礫層に至る。平安時代まで遡る遺構なし。	86㎡	02H459
42	九条二坊九町跡	下京区七条御所ノ内南町81	2003/4/7	GL-1.0mで湿地状堆積。	47㎡	02H530
43	九条四坊九条・十町跡	南区吉祥院大河原町28	2003/5/21	敷地全体が湿地状堆積。GL-110～120cmで地山(砂層)。	53㎡	03H025

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
44	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨柳田町35, 35-44	2003/7/10, 11	GL-3～4mまで廃棄物の堆積で, それ以下, 流れ堆積。本文12頁。	77㎡	15N07
45	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨鳥居本小坂町17-5,18-3～10及び化野町12-81～83, 12-88	2003/9/18	緩やかな傾斜地を削平して現在の宅地になっている。	18㎡	15N13

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
46	植物園北遺跡	左京区下鴨北芝町21-1,22-1	2003/4/9	GL-0.5mで柱穴・土壙・溝など多数検出。発掘調査を指示する。	40㎡	02S562
47	史跡賀茂御祖神社境内	左京区下鴨泉川町	2003/4/21	GL-0.6mで溝状遺構3条, 土壙1基を確認。	23㎡	14N041
48	上京遺跡・内裏町遺跡	上京区一条通西洞院東入元真如堂町366-1,368-1,370	2003/7/7	中世と思われる柱穴1・土壙2・溝1を検出するが, 大部分は幕末の機乱。	33㎡	03S156

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
49	六勝寺跡(白河南殿跡)	左京区二条通川端東入杉本町268-1	2003/7/15	GL-0.7m以下で2面の路面を確認するが, 全体に削平が著しい。	14㎡	03R186

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
50	六波羅政庁跡	東山区馬町通妙法院北門前妙法院前銅町422, 422-1	2003/10/22	GL-0.2～0.7mで地山を検出。傾斜地を削って平坦面をつくっていたため, 全体が削平されている。	35㎡	03S309
51	法性寺跡	伏見区深草東飯町2-7他地内	2003/8/11	斜面地に堆積する包含層を認めたが, 寺院に関連する遺構なし。	24㎡	03S218
52	芝町遺跡	山科区四ノ宮奈良野町69-1,69-2,68	2003/8/25	耕作土直下が橙色泥砂層の地山。遺構・遺物ともになし。	25㎡	03S241
53	中臣遺跡	山科区栗栖野打越町35-3,36-9,39-5	2003/10/29	敷地は丘陵頂部に位置しており, 全体に削平されていた。	13㎡	03N347
54	中臣遺跡	山科区勧修寺西金ヶ崎町245,256	2003/11/12	GL-0.5mで, 竪穴住居状遺構2棟, 柱穴・土壙多数を検出。設計変更を指示する。	16㎡	03N370

V　試掘調査一覧表

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
55	伏見城跡	伏見区東組町703-1，風呂屋町256-3，239	2003/8/8・29	石垣，石垣基礎，石垣と並行する溝，桃山時代の遺物集中遺構等を検出。設計変更を指示する。	66㎡	03F146
56	伏見城跡	伏見区東組町700-3	2003/9/29	GL-1.0mで地山。土壌などを検出。発掘調査を指示する。	20㎡	03F145
57	伏見城跡・御香宮鹿寺跡・金森出雲遺跡	伏見区桃山町金森出雲3-25	2003/5/26，27	近世初期の階段遺構を検出。設計変更を指示する。本文18頁。	99㎡	03F065
58	伏見城跡・金森出雲遺跡	伏見区観音寺町	2003/6/4	時期不明の礎石を検出。試掘調査の延長を指示する。	28㎡	03F091
59	伏見城跡	伏見区南浜町273-2	2003/9/25	大半が旧建物の基礎により撹乱されていたが，部分的に幕末頃の土間状遺構を検出。	32㎡	03F087

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
60	唐橋遺跡	南区唐橋川久保町17,22の内，予定地番17-3	2003/8/4	道路面-50cmで奈良時代以前の土壌・溝・柱穴などを検出。試掘調査の延長を指示する。本文23頁。	125㎡	03S205
61	鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町101-1	2003/6/9	敷地全体が勝光明院の池内と思われる。道路面-2.5mで池底。基礎深度が浅く遺構への影響なし。	28㎡	03T096
62	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田内畑町58，59	2003/12/10	GL-1mで近世の南北溝1条のみ検出。	24㎡	03T404
63	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田東小屋ノ内町17-1の一部	2003/12/3	調査対象範囲のほぼ全域が現代攪乱を受けている。	13㎡	03T412
64	鳥羽離宮跡	伏見区竹田田中宮町41-1,62	2003/10/20	鎌倉時代頃の井戸，土壌等を検出。中世集落の縁辺部と考えられる。	60㎡	03T226
65	鳥羽離宮跡	伏見区中島前山町32,33	2003/11/10	GL-1.4mで盛地状堆積。同-2.3mで砂礫の地山。	19㎡	03T362

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
66	中久世遺跡	南区久世中久世町5-16,17-1	2003/6/2	道路面-0.7mで古墳時代の竪穴住居跡を検出。立会調査を指示する。本文28頁。	31㎡	03S089
67	中久世遺跡	南区久世殿城町155,156,157の一部	2003/11/19	弥生時代遺物を含む大規模な流路跡を検出。設計変更を指示する。本文30頁。	32㎡	03S361
68	松室遺跡	西京区松室北河原町63-1（洛西第二土地区画整理事業による仮換地）第12ブロック63-1B，63-1D	2003/7/16	GL-1.8m と2.3mの2箇所で安定した生活面を検出するが，遺構はなし。	23㎡	03S144

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
69	長岡京左京北辺四坊十町・十一町跡	南区久世落山町212-1	2003/10/16	GL-1.9～2.3mで地山。軟弱地盤で湿地に近い。	119㎡	03NG303
70	長岡京左京五条四坊五町・六町跡	伏見区羽束師古川町219-19	2003/4/16	大量の廃棄物を敷地内に投棄しており，遺構面は削平されたと考えられる。	6㎡	02NG534
71	長岡京左京九条三坊十三町跡	伏見区納所町560-1 他4筆	2003/12/25	調査地は旧宇治川の河川敷に該当する。	33㎡	03NG432

報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないいせきしくつちょうさがいほう
書 名	京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	北田栄造・長谷川行孝・馬瀬智光・堀 大輔
編 集 機 関	京都市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発 行 年 月 日	西暦2004年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
平安宮朝堂院応天門跡・聚楽遺跡	京都府京都市中京区 聚楽廻南町25-4	26100	234	35度 0分 54秒	135度 44分 32秒	2003/2/20, 6/17,19,20, 7/15	26	共同住宅
平安京左京四条一坊三町跡	京都府京都市中京区 壬生御所ノ内町17-3 15, 16-1	26100		35度 0分 16秒	135度 44分 39秒	2003/9/17	29	共同住宅
平安京左京五条二坊九町跡	京都府京都市下京区 四条堀川町262他	26100		35度 0分 12秒	135度 45分 9秒	2003/11/6	112	共同住宅
史跡名勝嵐山	京都府京都市右京区 嵯峨柳田町35, 35-44	26100	A809	35度 0分 46秒	135度 41分 9秒	2003/7/11	77	共同住宅
法勝寺跡	京都府京都市左京区 岡崎法勝寺町 京都市動物園内	26100	417-1	35度 0分 45秒	135度 47分 10秒	2003/2/24	16	厩舎

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮朝堂院応天門跡・聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代 桃山時代	近世土壙	土師器・瓦	
平安京左京四条一坊三町跡	都城跡	平安時代	湿地状堆積・道路側溝	土師器・緑釉陶器・白磁他	
平安京左京五条二坊九町跡	都城跡	平安時代	井戸	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器 他	
史跡名勝嵐山			流れ堆積・整地層	伏見人形	
法勝寺跡	寺院跡	平安時代	池跡	土製緑釉円塔	設計変更により遺構保存をはかる

報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないいせきしくっちょうさがいほう
書 名	京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編 著 者 名	北田栄造・長谷川行孝・馬瀬智光・堀　大輔
編 集 機 関	京都市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒602- 8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発 行 年 月 日	西暦2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡	京都府京都市伏見区 桃山町金森出雲3-25	26100	1172 1177 1176	34度 56分 2秒	135度 45分 58秒	2003/5/26・27	99	宅地造成
唐橋遺跡	京都府京都市南区 唐橋川久保町17, 22他	26100	756	34度 58分 43秒	135度 44分 11秒	2003/8/4, 9/26～10/3	125	宅地造成
中久世遺跡 1	京都府京都市南区 久世中久世町5-16, 17-1	26100	772	34度 57分 31秒	135度 42分 44秒	2003/6/2	31	工場
中久世遺跡 2	京都府京都市南区 久世殿城町155, 156他	26100	772	34度 57分 22秒	135度 42分 58秒	2003/11/19	32	店舗
長岡京跡・淀城跡	京都府京都市伏見区 淀池上町 (京阪電鉄淀駅構内)	26100	1191	34度 54分 14秒	135度 43分 3秒	2003/10/16	119	線路高架化

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡	城跡 寺院跡 散布地	桃山時代 奈良時代～平安時代 縄文時代	階段遺構, 溝	瓦 瓦	設計変更により遺構保存をはかる
唐橋遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	竪穴住居跡, 溝	須恵器・土師器	
中久世遺跡 1	集落跡	縄文時代～室町時代	竪穴住居跡	土師器・須恵器	
中久世遺跡 2	集落跡	縄文時代～室町時代	流路跡	弥生土器	
長岡京跡・淀城跡	都城跡 城跡	平安時代 江戸時代	石垣・土壙		設計変更により遺構保存をはかる

図　　版

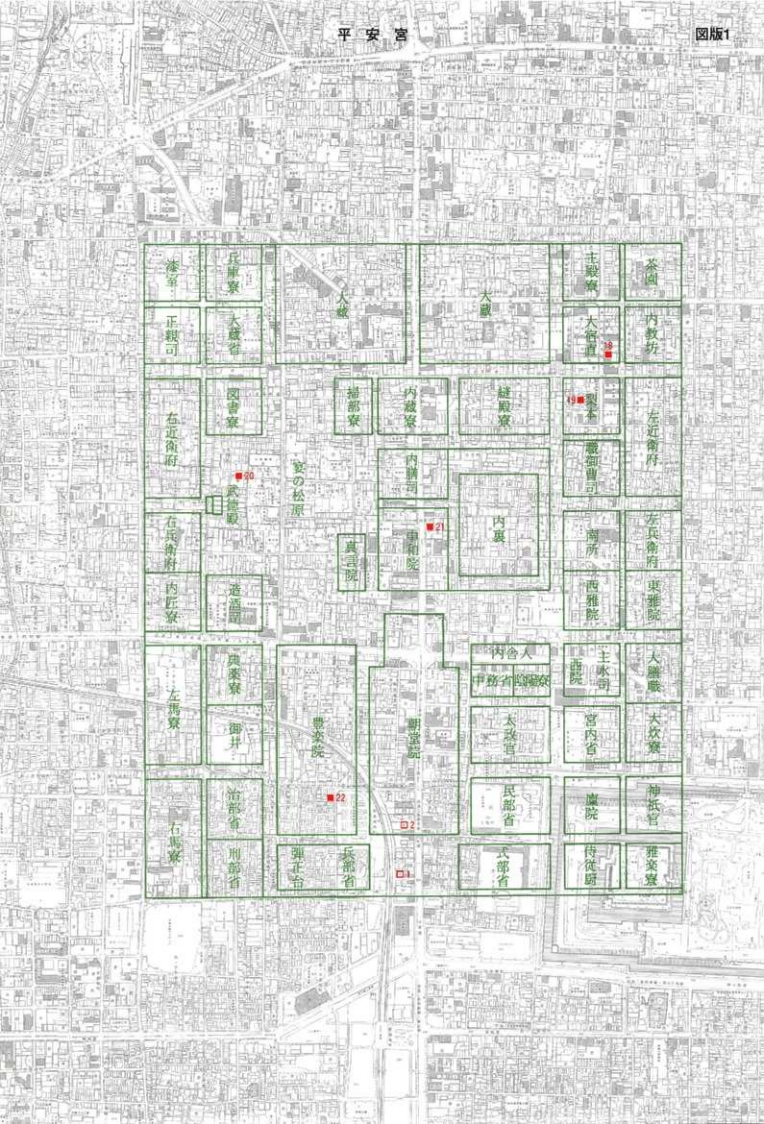
凡　例

平成15年試掘調査地点

□　1月～3月　　■4月～12月

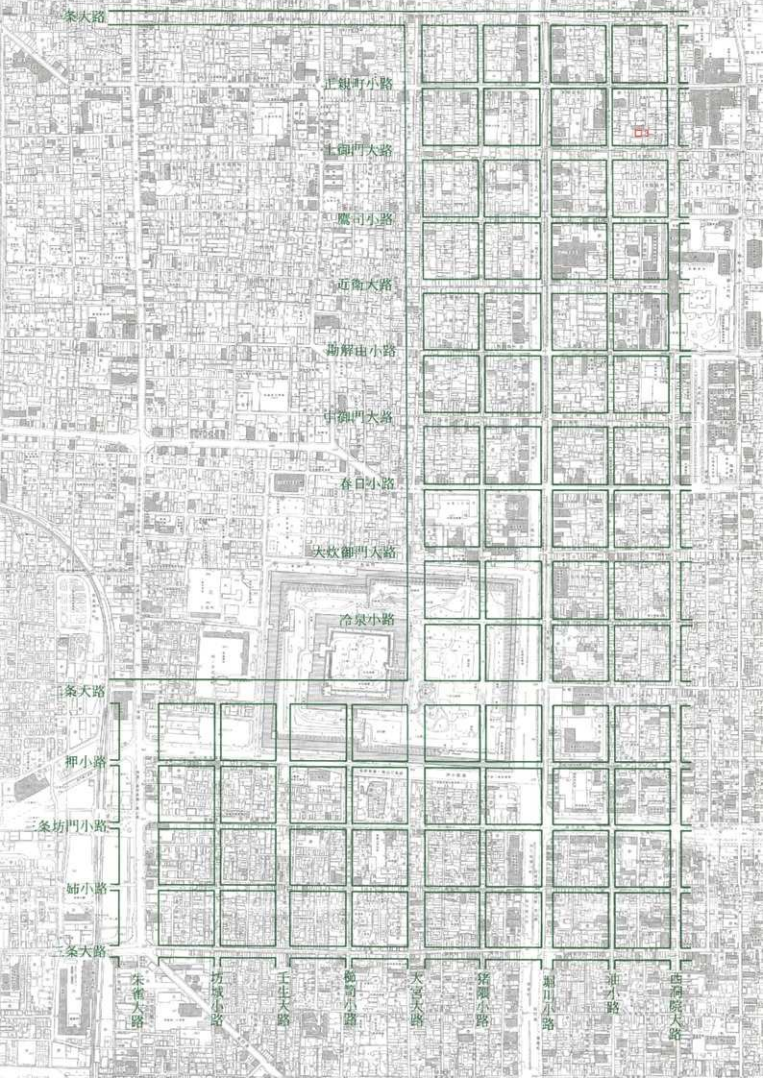
－－－－－　遺跡範囲

平安宮


漆部
兵庫寮
大蔵省
正親司
図書寮
右近衛府
武徳殿
右兵衛府
内匠寮
造酒司
左馬寮
御井
典薬寮
豊楽院
治部省
刑部省
石馬寮
弾正台
兵部省
宴の松原
真言院
内裏
内蔵寮
内膳司
内侍所
中務省
朝堂院
民部省
式部省
大膳
大蔵
主殿寮
大宮直
内教坊
茶園
左近衛府
左兵衛府
東雅院
大膳職
大炊寮
神祇官
雅楽寮
侍従所
宮内省
太政官
内舎人
図書寮
主水司
西雅院
内豎所
中務省
内蔵寮
内膳司
梨本
18
19
21
22
20
1
2

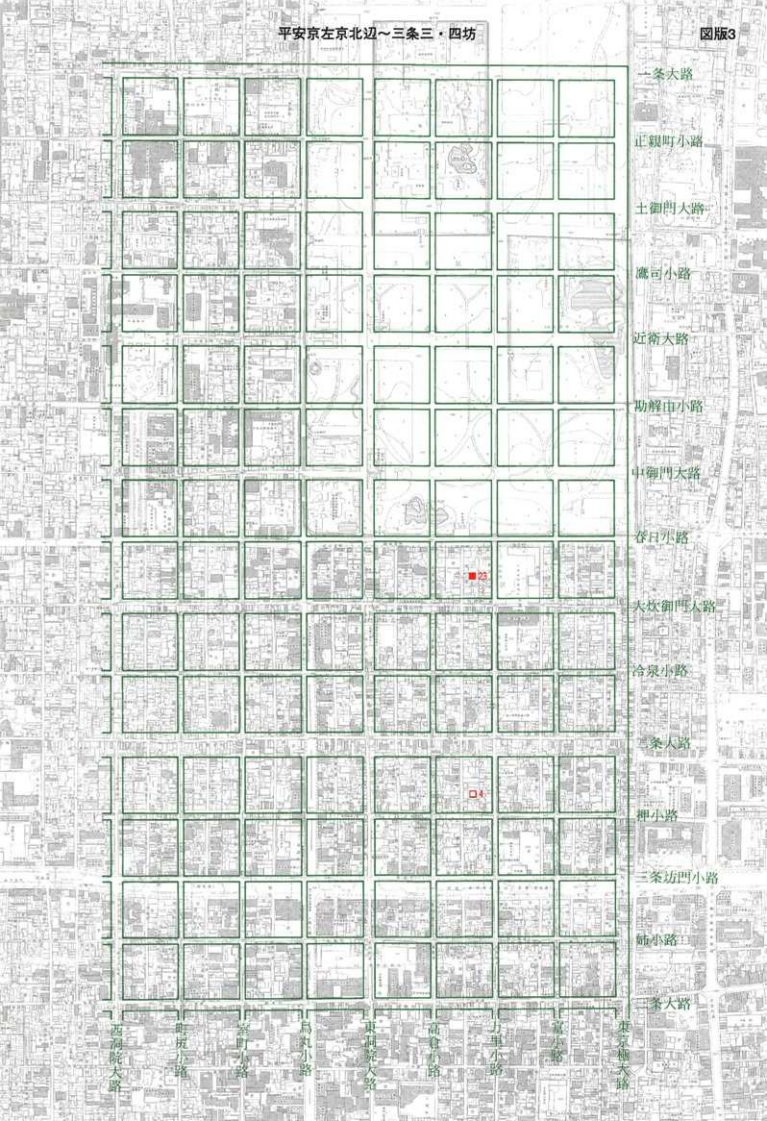
図版2

平安京左京北辺～三条一・二坊



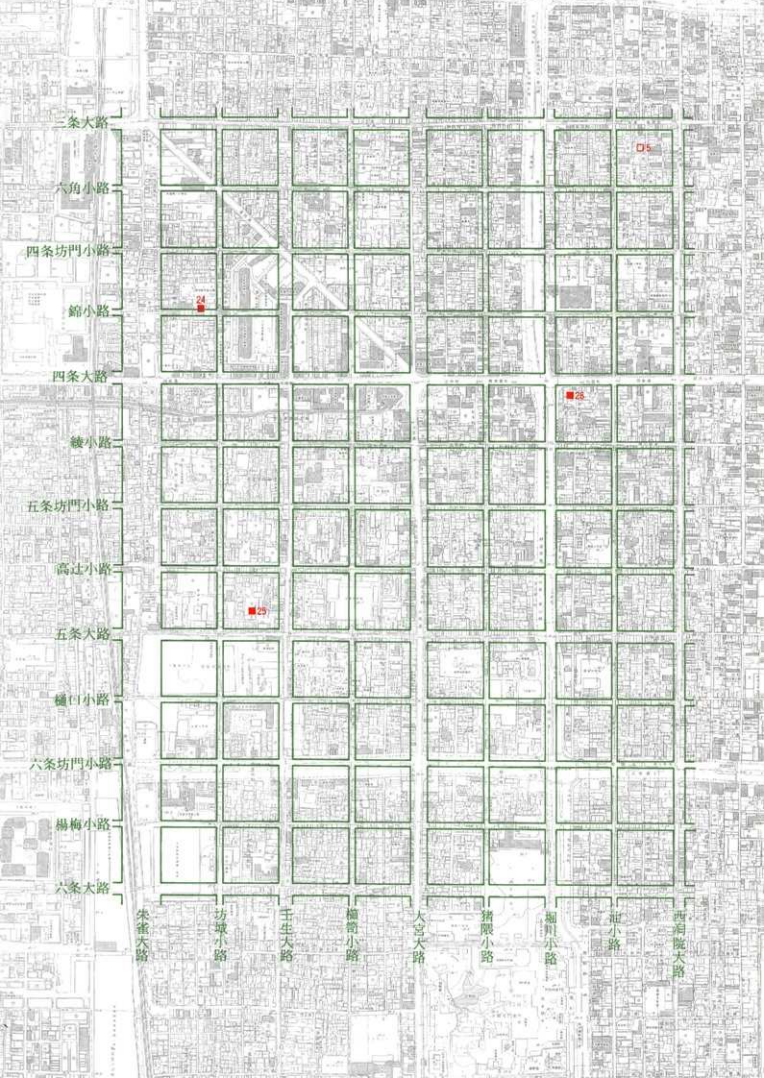
平安京左京北辺～三条三・四坊

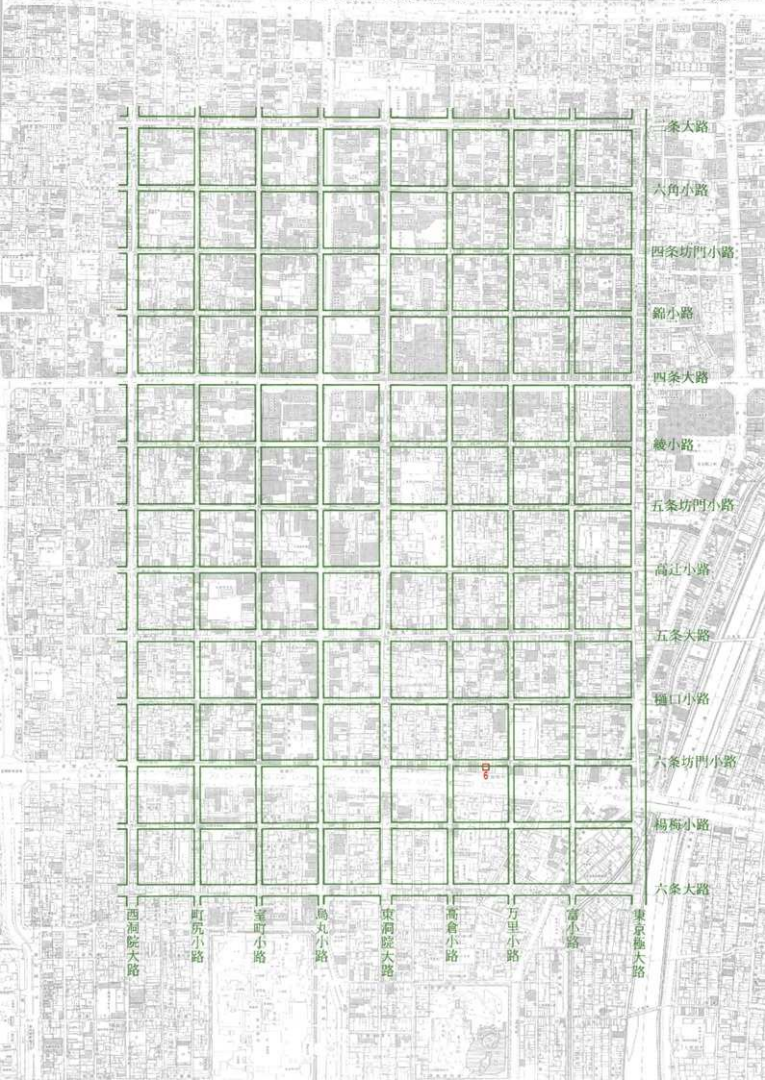
図版3



図版4

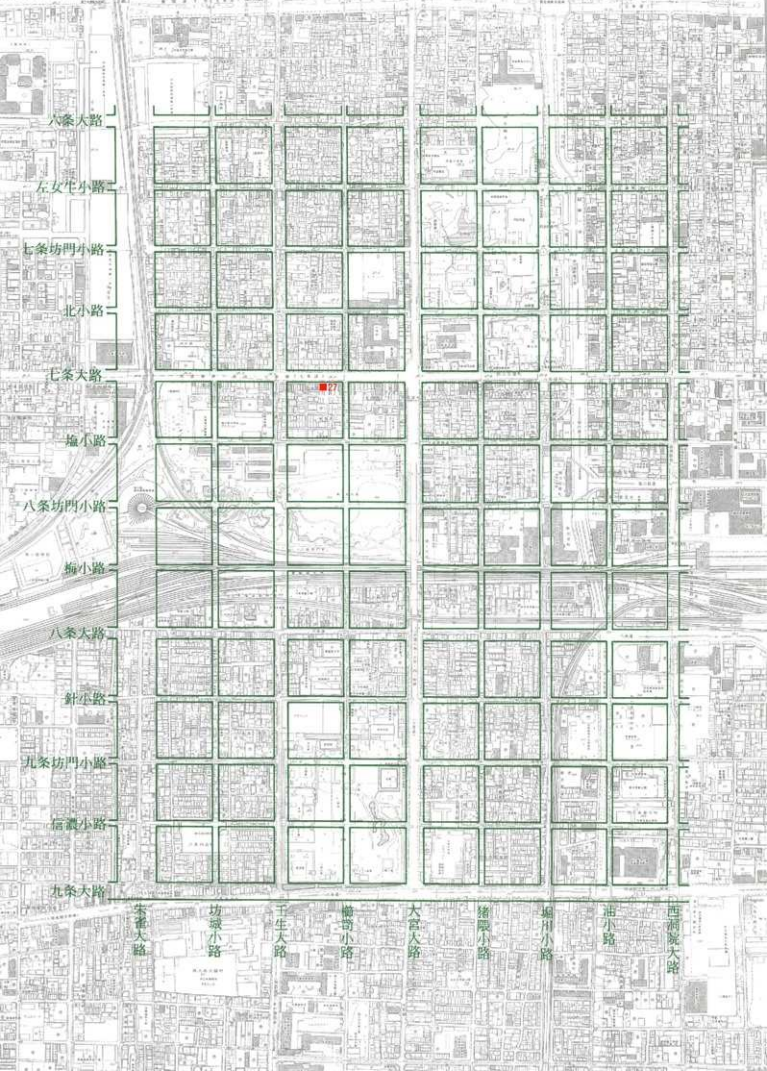
平安京左京四～六条一・二坊



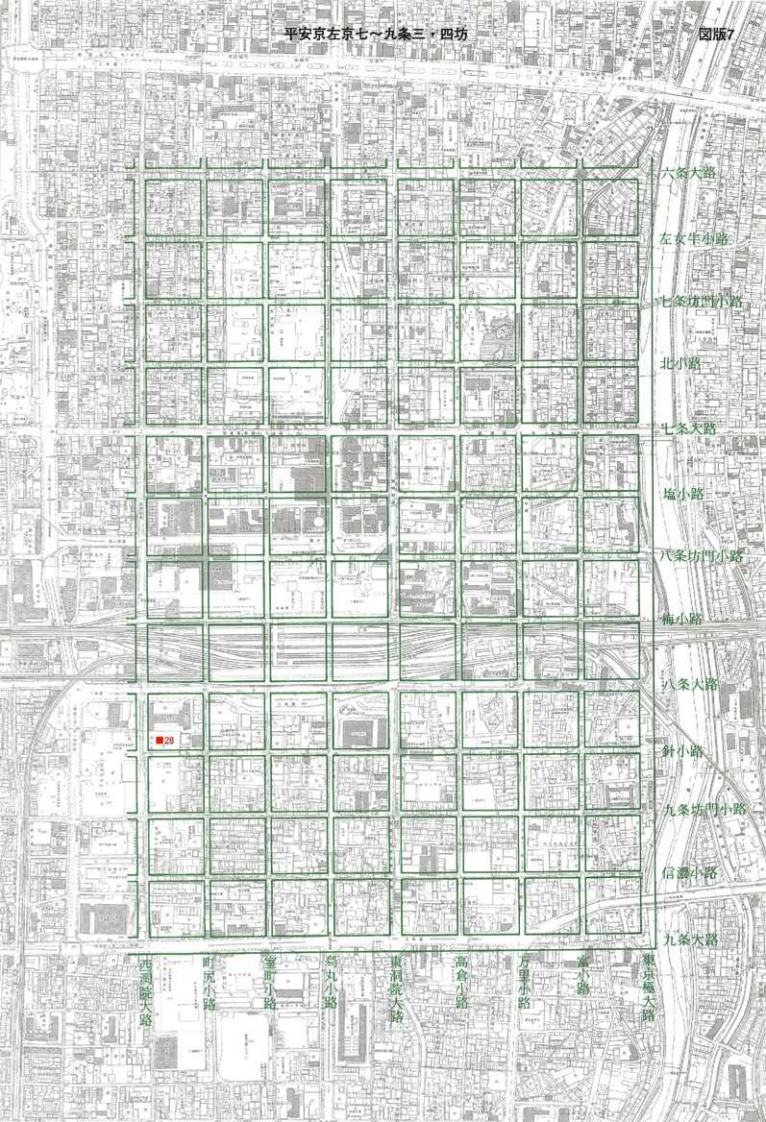

一条大路
六角小路
四条坊門小路
錦小路
四条大路
綾小路
五条坊門小路
高辻小路
五条大路
樋口小路
六条坊門小路
楊梅小路
六条大路
西洞院大路
町尻小路
室町小路
烏丸小路
東洞院大路
高倉小路
万里小路
富小路
東京極大路

図版6

平安京左京七～九条一・二坊

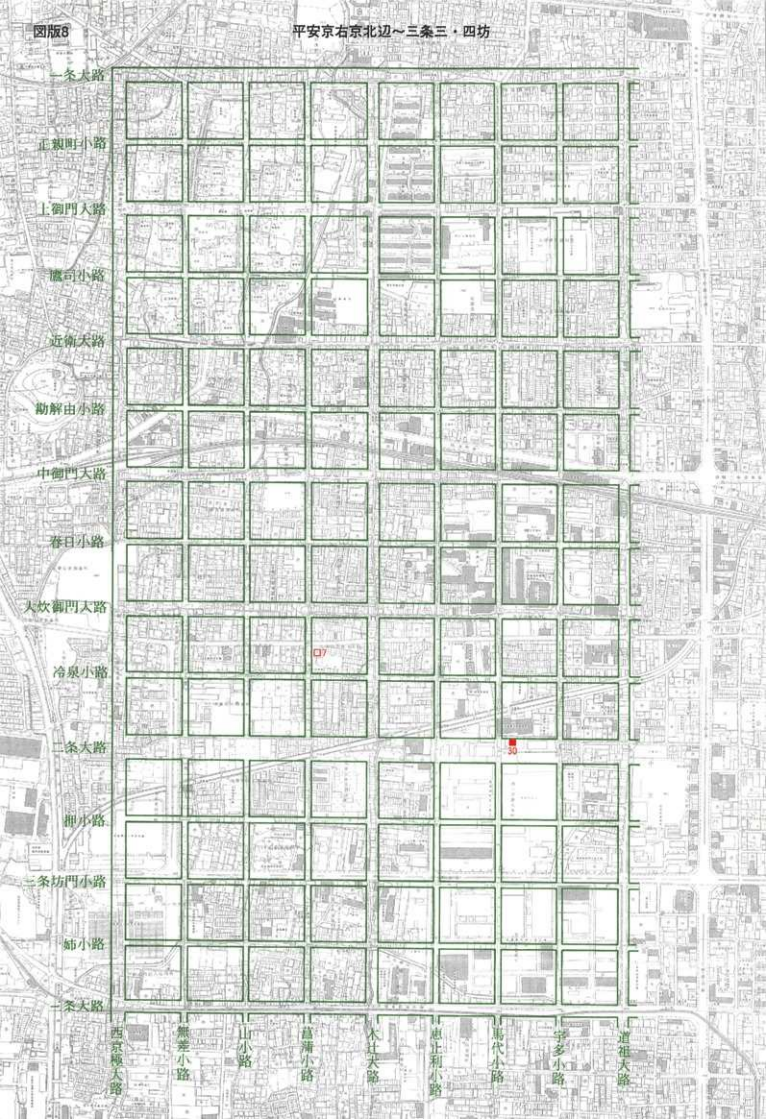


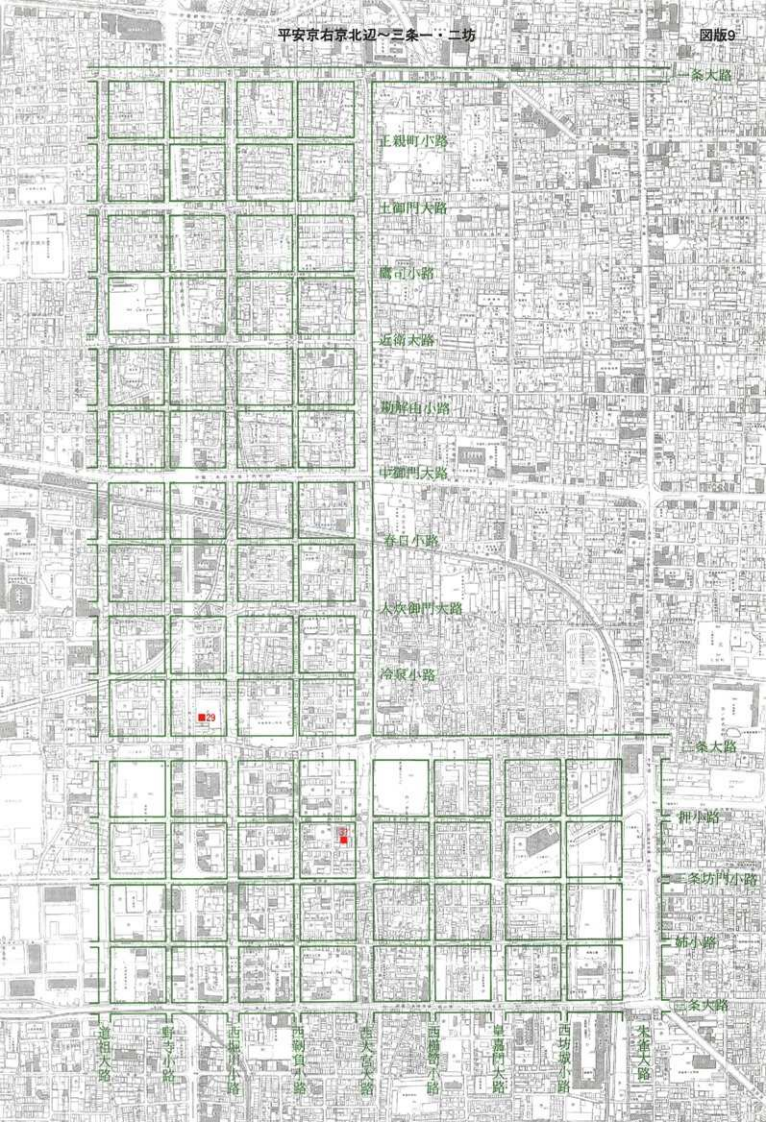
平安京左京七～九条三・四坊



図版8

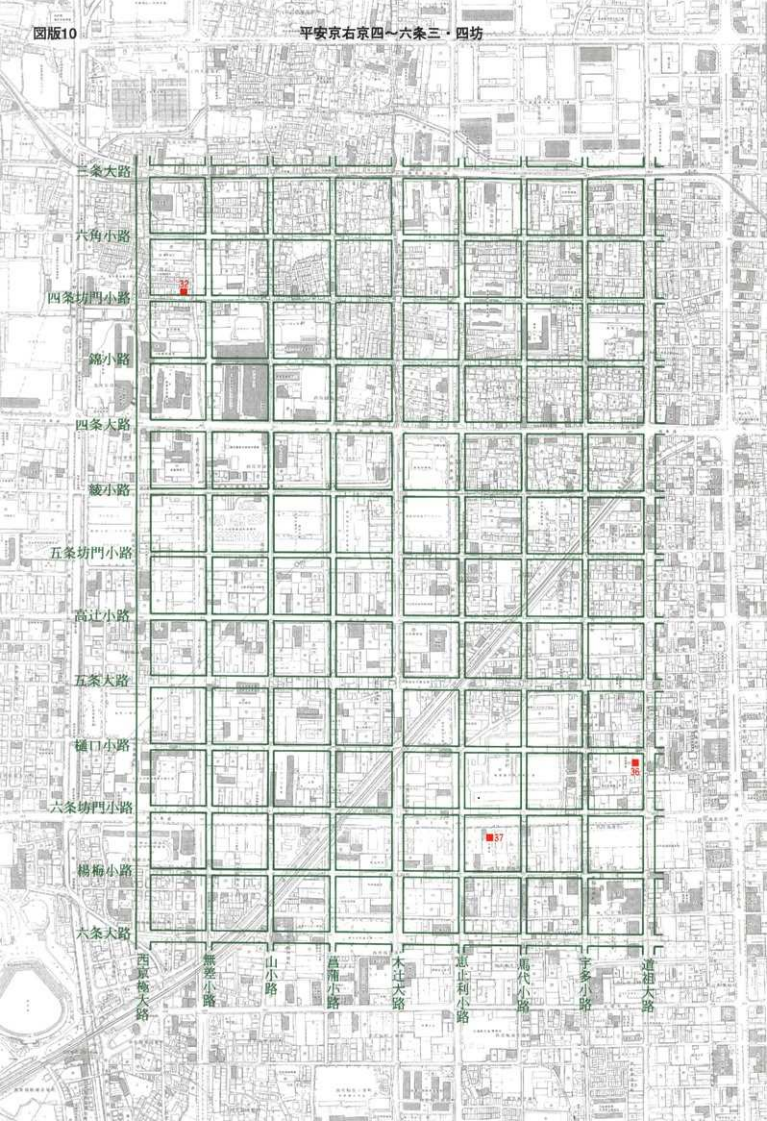
平安京右京北辺～三条三・四坊



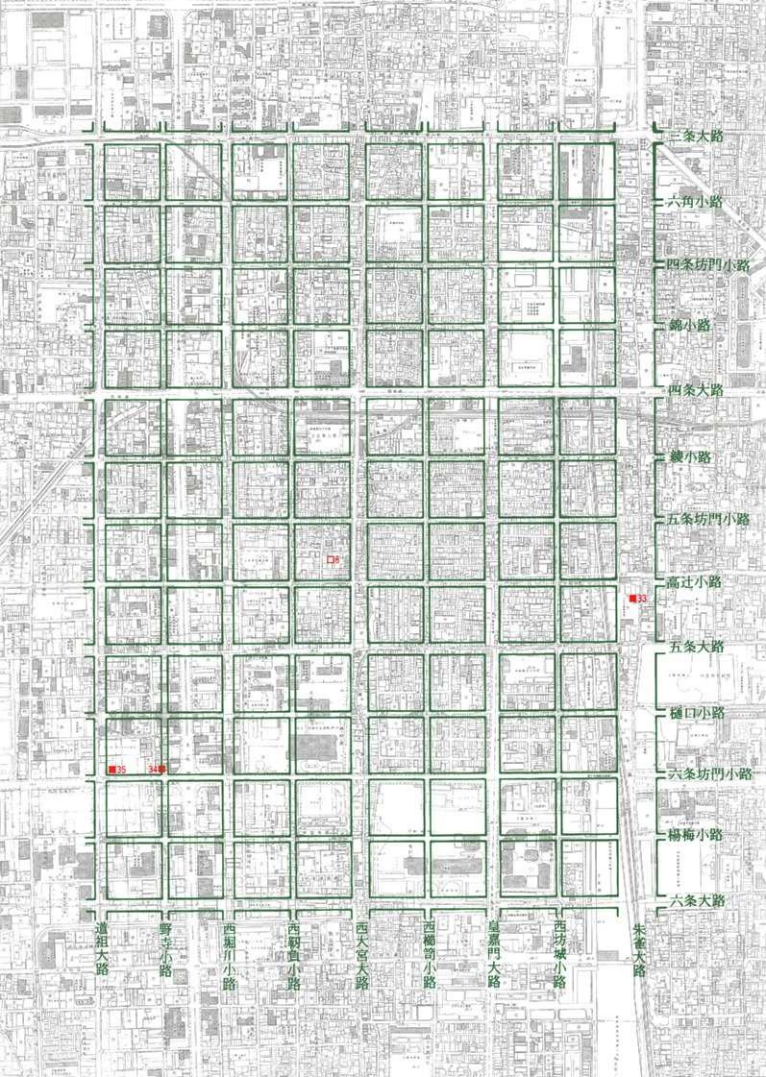

一条大路
正親町小路
土御門大路
鷹司小路
近衛大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
二条坊門小路
姉小路
三条大路
道祖大路
野寺小路
西堀川小路
西洞院大路
西大宮大路
西櫛笥小路
皇嘉門大路
西坊城小路
朱雀大路

図版10

平安京右京四～六条三・四坊

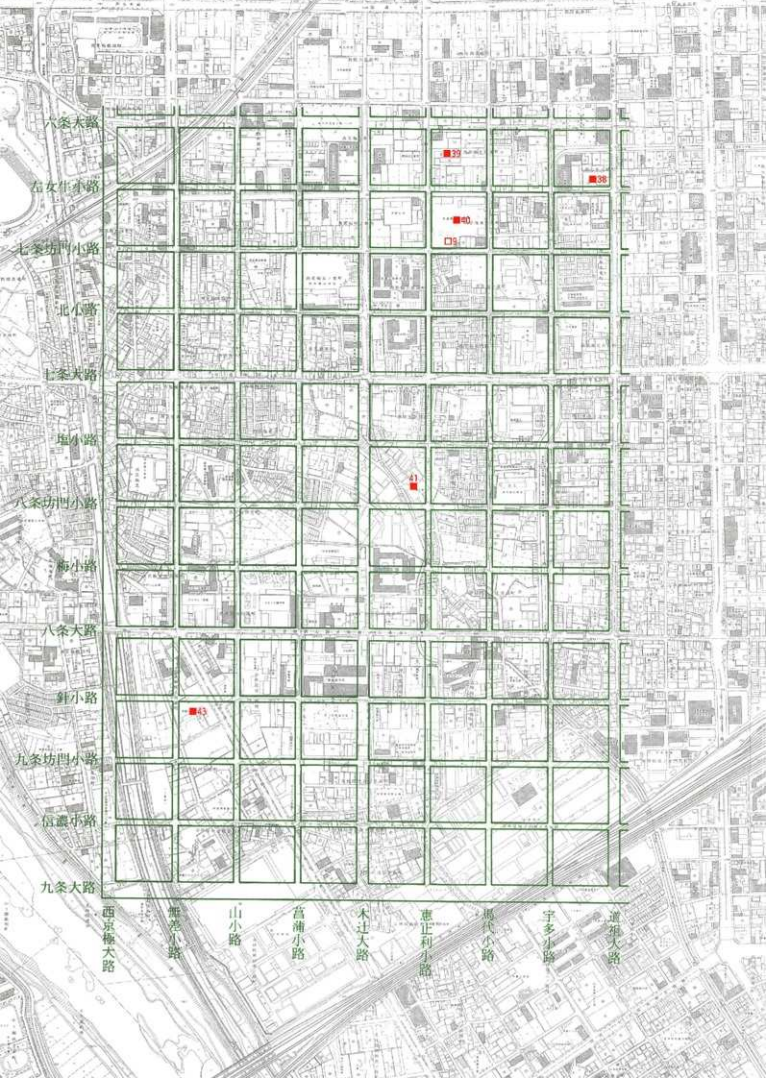


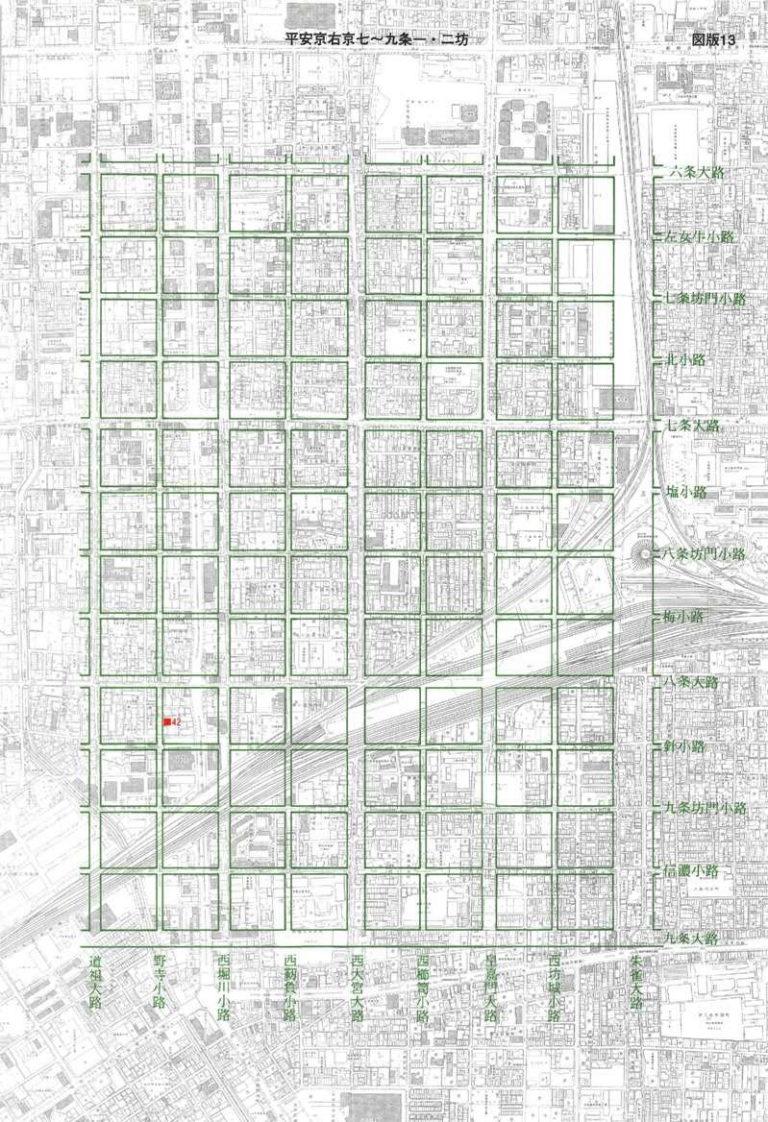
平安京右京四～六条一・二坊



図版12

平安京右京七～九条三・四坊




六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
鉾小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路
道祖大路
野寺小路
西堀川小路
西洞院小路
西大宮大路
西櫛笥小路
烏丸小路
西坊城小路
朱雀大路
■42

図版14

上京遺跡

公家町遺跡

48

平安京跡

45

史跡名勝嵐山

植物園北遺跡

11

10

史跡名勝嵐山

44

松室遺跡

05

図版15

白河街区跡

六勝寺跡

45

12

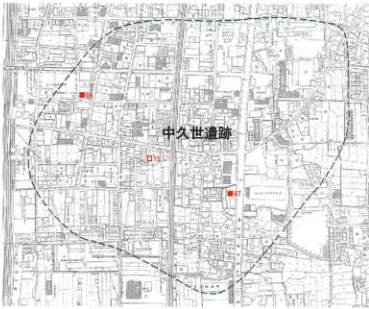
史跡賀茂御祖神社境内

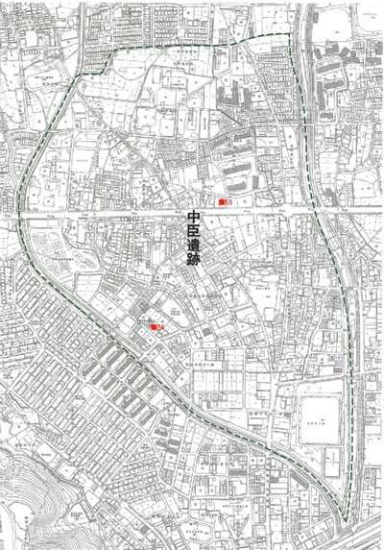
37

六波羅政庁跡

50

図版16





図版17

伏見城跡

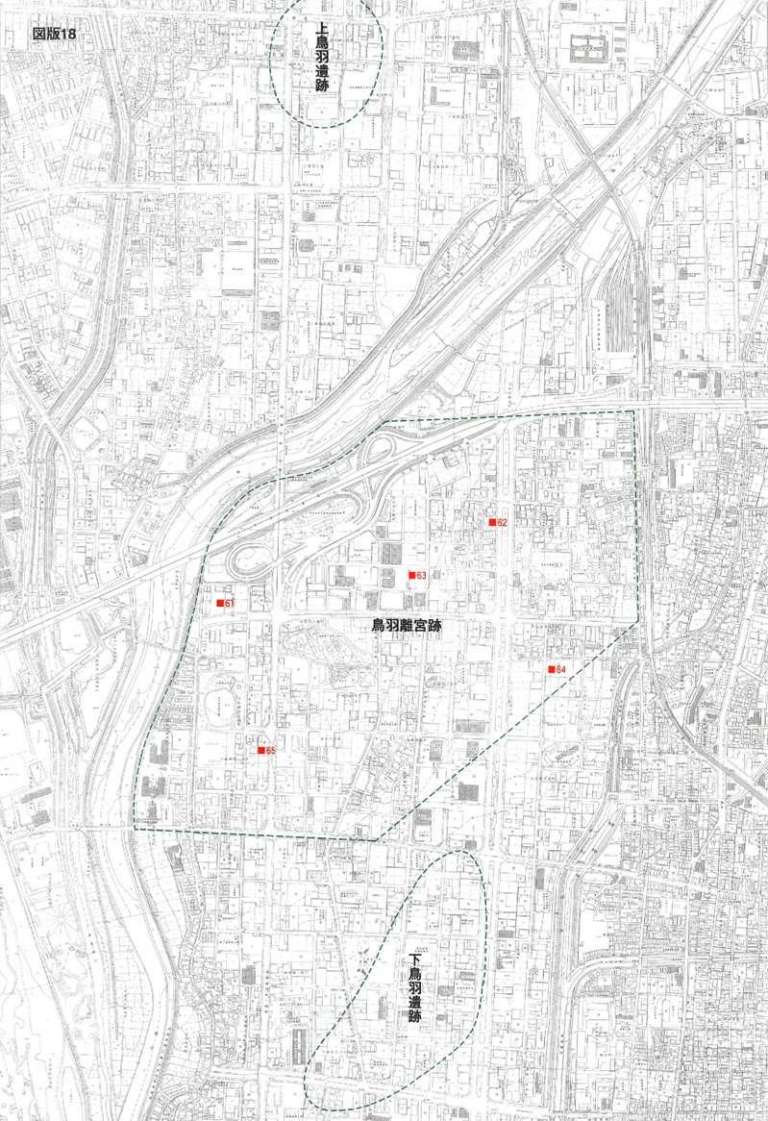
唐橋遺跡

旧淀城跡

長岡京跡

淀城跡

図版18



■69
長岡京跡
■70

京都市内遺跡試掘調査概報

平成15年度

発行日　2004年３月31日
京都市印刷物 第153144号
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市埋蔵文化財調査センター
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL.（075）441-5261
印　刷　泰和印刷株式会社　TEL.（075）605-6800

ひと・まち・ロマン
元気都市・京都